

クレジット:

UTokyo Online Education 学術俯瞰講義 2017 鶴見英成

ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限ってページ単位で利用することができます。特に記載のない限り、本講義資料はページ単位でクリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下に提供されています。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。



20171211

学術俯瞰講義 2017年Aセメスター
「文化資源、文化遺産、世界遺産」

鶴見英成
(総合研究博物館)

アンデス文明研究の成果と課題①遺跡をめぐって



ハンカオ遺跡(ペルー、ワヌコ市)と出土遺物

UTokyo Online Education 学術俯瞰講義 2017 鶴見英成



CC BY-NC-ND

ハンカオ遺跡(2017年)



【趣旨】

南米ペルーでの考古学調査の成果を紹介しつつ、文化資源・文化遺産としての考古資料をめぐる課題を、実体験をもとに指摘していく。

三菱財団人文科学研究助成(平成12～14年)
「ペルー国ワヌコ地方形成期文化の研究」
研究代表者:井口欣也



12/11

①遺跡をめぐるって

12/18

②博物館をめぐるって

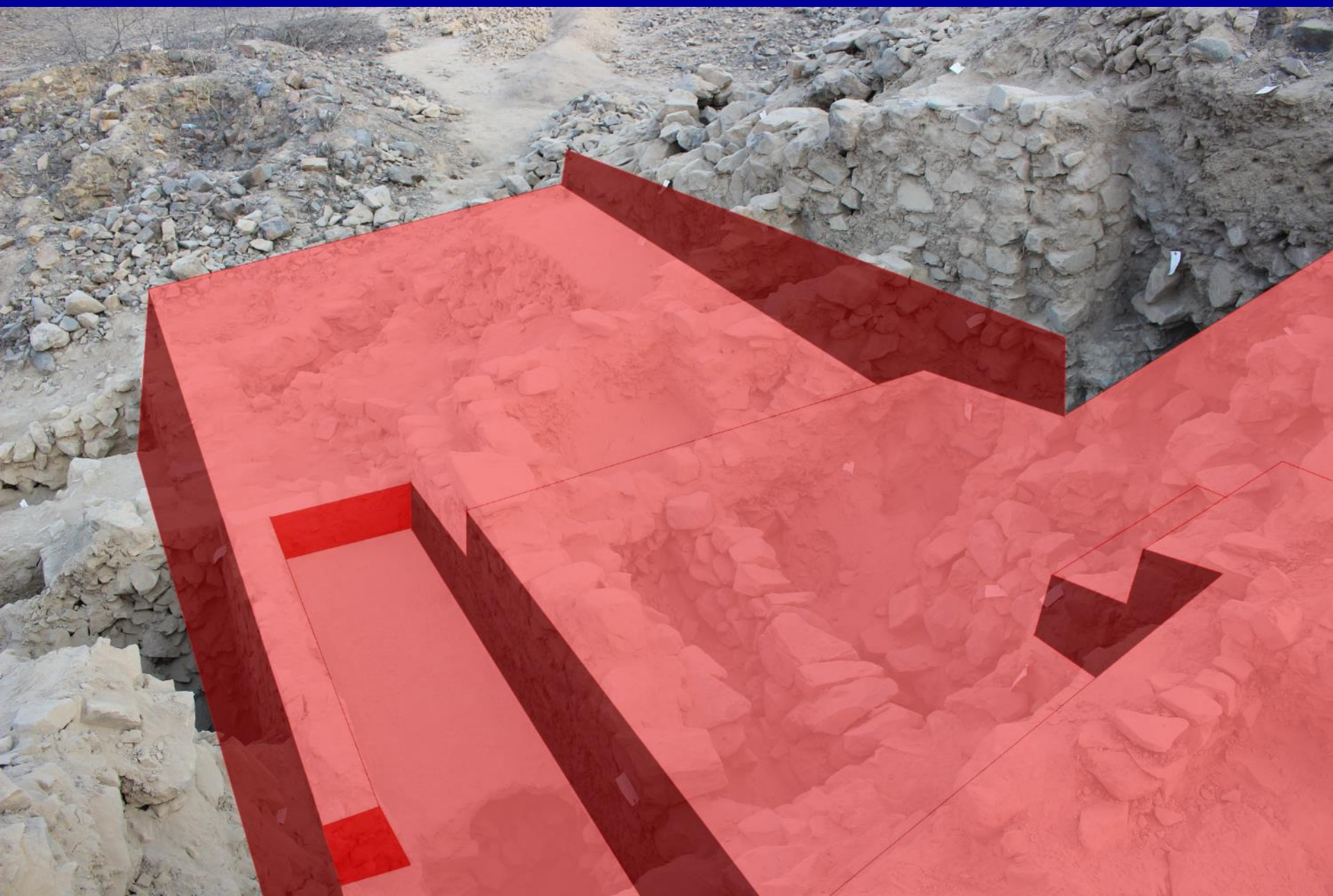
ハンカオ遺跡(2001年)

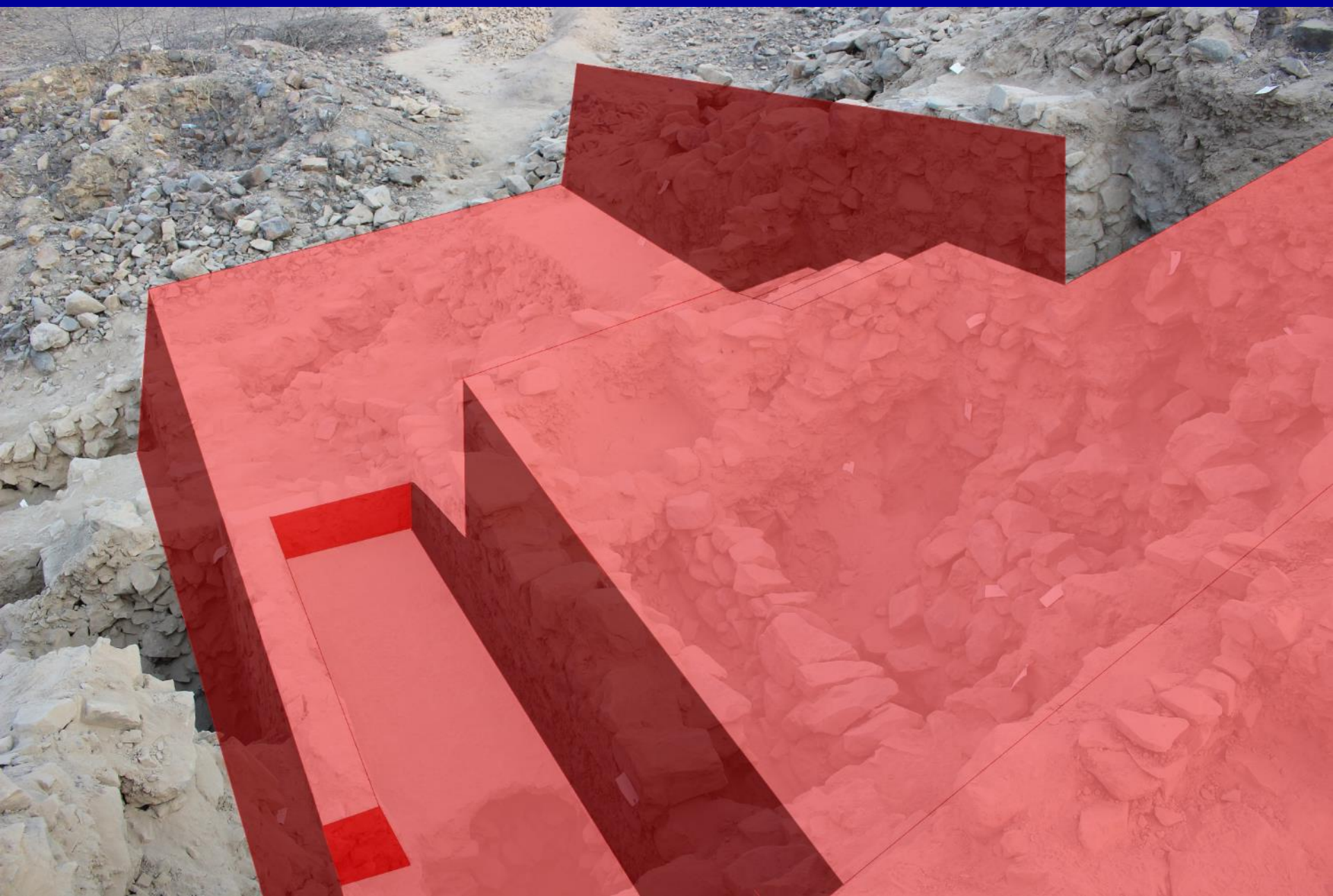
21年間、アンデス文明の「形成期」の神殿について調査してきた。
多くの神殿遺跡は巨大なマウンド(≡土まんじゅう)となっている。

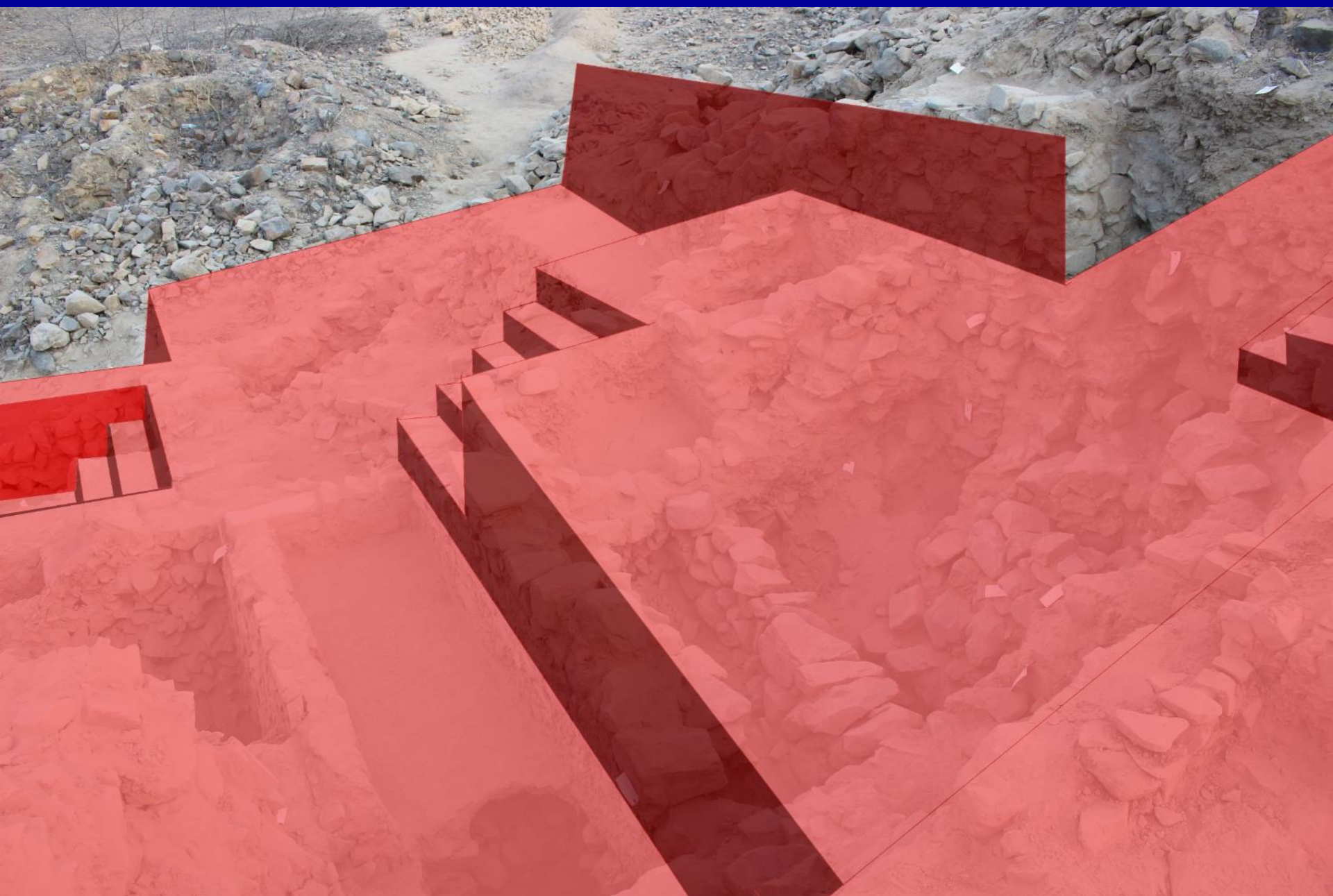


モスキートZ神殿(モスキート遺跡)の例。
4000年ほどの間に、弱い部分が崩れてマウンドとなったが、発掘すると部分的に壁
や床が見つかり、かつての建築の形がわかる。









幼少時、近所に古墳があったためか、漠然と古代史に興味を持つ。
とくに大きな人工物(モニュメント)に惹かれる。



野毛大塚古墳(東京都世田谷区)

Photo by Aimaimyi, from Wikipedia Commons ref.20180131
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%87%8E%E6%AF%9B%E5%A4%A7%E5%A1%9A%E5%8F%A4%E5%A2%B3#/media/File:Noge_Otsuka_Kofun_-01.jpg
CC BY-SA 3.0

幼少時、近所に古墳があったためか、漠然と古代史に興味を持つ。
とくに大きな人工物(モニュメント)に惹かれる。



芝丸山古墳(東京都港区)

Photo by Saigen Jiro, from Wikipedia Commons ref.20180131
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%8A%9D%E4%B8%B8%E5%B1%B1%E5%8F%A4%E5%A2%B3#/media/File:Shiba-maruyama-kofun_zenkei.JPG
CC0

古代のモニュメントが現代の景観に溶け込む様子が面白く感じられ、
「なぜその遺跡はその地点にできたのか」という研究テーマに。

「熱帯高地」

中央アンデス地域は
赤道に近くかつ
標高差が大きい。



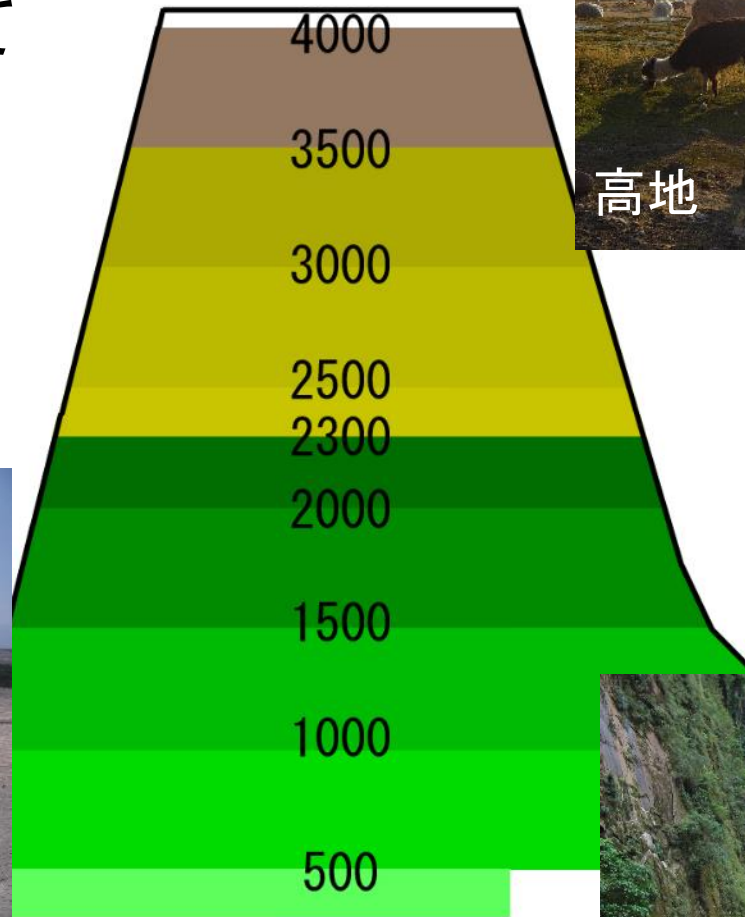
標高

4000
3500
3000
2500
2300
2000
1500
1000
500
0

「世界中のあらゆる自然環境が
集まっている」とも言われる。

多様な自然環境

高度差を利用して
様々な資源を
入手できる



「インカ帝国」

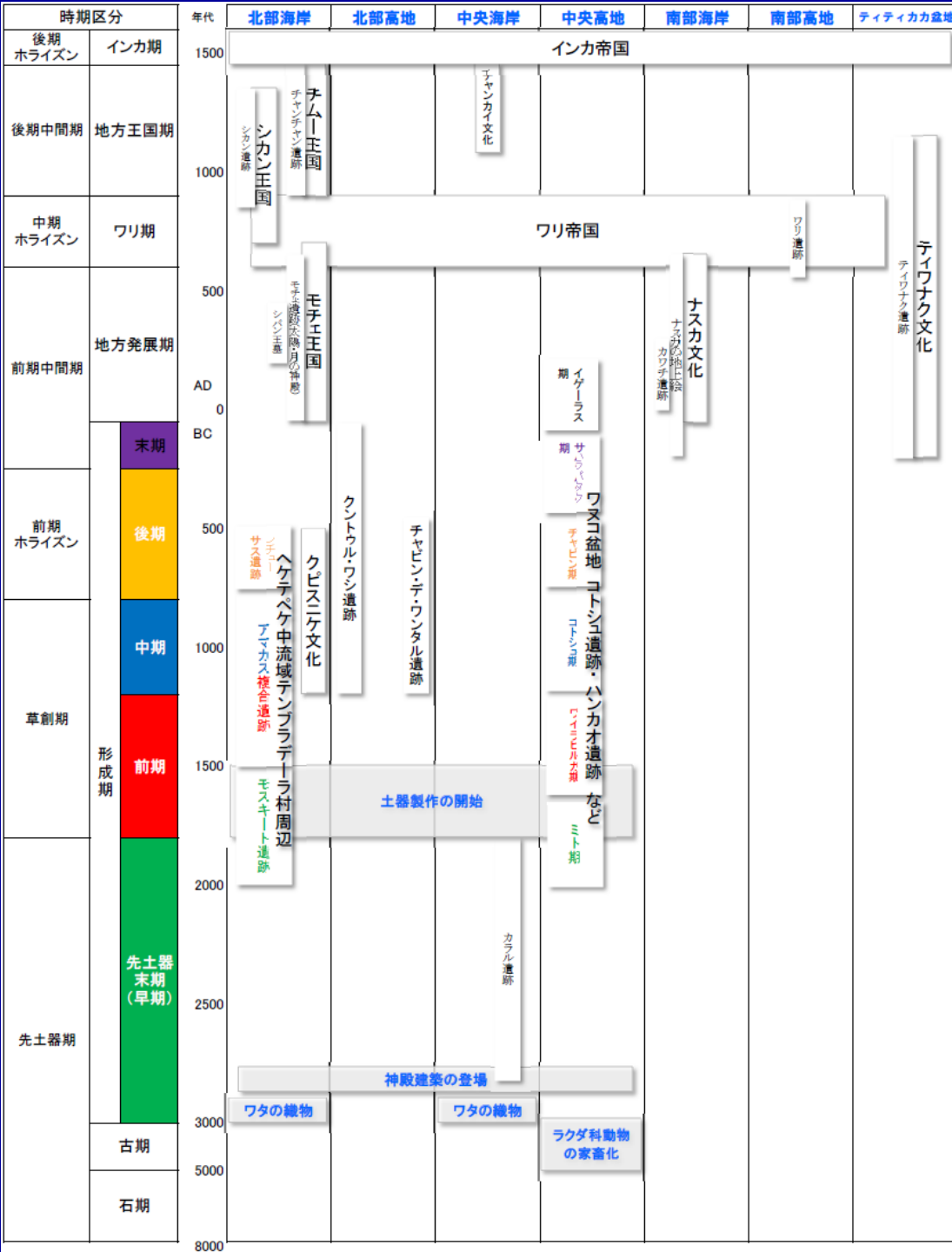
地域間の資源交換に基づいて
なりたっていた

マチュピチュ遺跡



帝都クスコ





インカ帝国に関しては、征服者のスペイン人たちが文書記録を残した。

それ以前の社会について、遺されたモノから考古学者が解明しようとしている。

形成期(文明形成期):
社会組織、
農耕・牧畜などの経済、
建築・製陶・冶金などの技術、
そういった文明の基盤が
しだいに形成された時期。

アンデス文明のユニークさ

他の文明と交流せず、独自に発展した。
「地球上のあらゆる自然環境」を利用した。
→「人類史における壮大な実験場」と言われる。

アフリカ・ユーラシアの「四大文明」と大きく異なる。

- ・大河流域の発祥ではない。
- ・文字を持たない古代文明である。

アンデス文明はどのように始まったのか？



チャビン・デ・ワントル遺跡

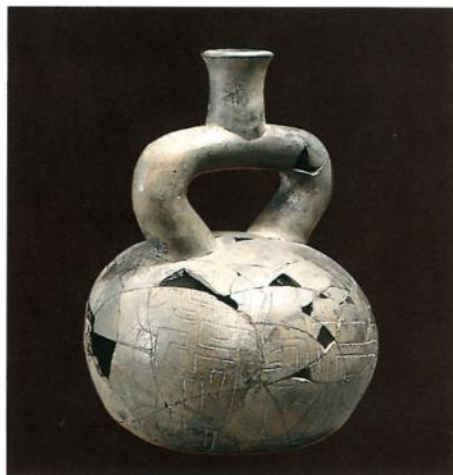
山地に位置する壮麗な石造の神殿。

内部に複雑な回廊をめぐらせ、優れた装飾を持つ。

1930年代から調査が進められ、アンデス文明の起源と考えられるようになった。



a



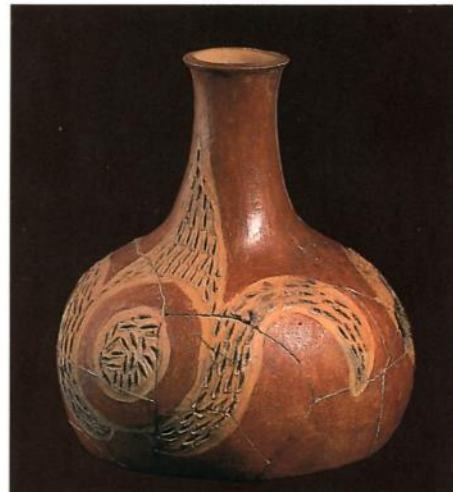
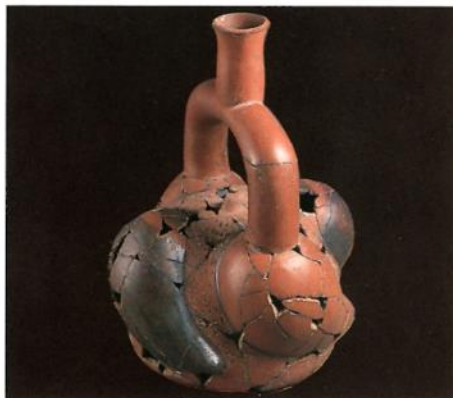
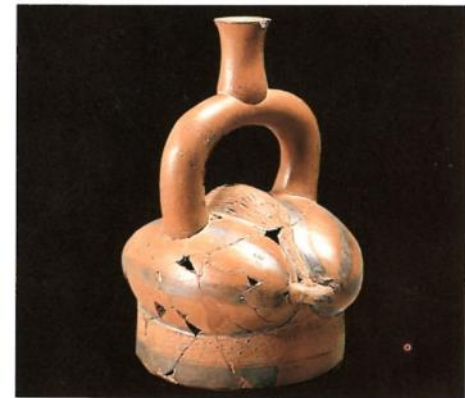
b



a



b



「チャビン文化」

Lumbreras, L. G. (1993), "Chavin de Huantar: Excavaciones en la Galeria de las Ofrendas"
Materialien zur Allgemeinen und Vergleichenden Archaeologie
51 Mainz am Rhein: P. von Zabern
付録LAMINASC(a,b,c,d) D(a,b,c,d)

チャビン・デ・ワントル遺跡に見られるような美術や建築のこと。それが中央アンデスの広い範囲に分布するようになった、と考えることが多かった。

(実際には、「形成期」の様々な時代のものである。)

東京大学による調査



1958年

石田英一郎教授・泉靖一教授ら
文化人類学教室による第1次調査。
ペルーを中心に遺跡を踏査。

文明の起源を解明するための調
査地を探し、コトシュ遺跡に着目。

コトシュ遺跡

コトシュ遺跡

1960年代、東京大学調査団
最初の本格的な発掘プロジェクト



コシュ遺跡の発掘 考古学上の大きな成果 1

「チャビン文化」よりも古い土器が存在する。しかも、土器がない時代から大規模な建築が建てられている。



形成期末期
サハラパタク期
(前250-50年)



形成期後期
チャビン期
(前600?-250年)



形成期中期
コシュ期
(前1200-600?年)



形成期前期
ワイラヒルカ期
(前1800-1200年)

写真
UMUT



交差した手の神殿

白の神殿

写真 東京大学アンデス調査団

※このページの画像について許可なく画像の転用を行うことを禁止する

宗教的なシンボル「交差した手」で装飾された部屋。
その機能は「神殿」と考えられる。



土器の有無の重要性

土器は重く割れやすく移動に適さない。

穀物の調理に便利である。

→よって農耕定住村落の指標とされた。

穀物は余剰生産をうみ、経済格差が生じる。

組織的な農作業、水資源の管理には、リーダーシップや集団間の交渉が必要になる。

→社会が複雑になっていくと考えられる。

そのため、土器の登場は文明形成の指標と考えられていた。

土器すら持たない集団が、共同労働によって神殿建築を造っていた、というのは想定外の発見であった。しかし、膨大な量の土器が出土したあと、まったく出なくなったということで、説得力のある調査成果であった。



世界遺産 カラル遺跡

土器の登場よりも神殿の成立が古いことはその後は定説となり、文明がいかに始まったかというテーマのもとさかんに研究されている。



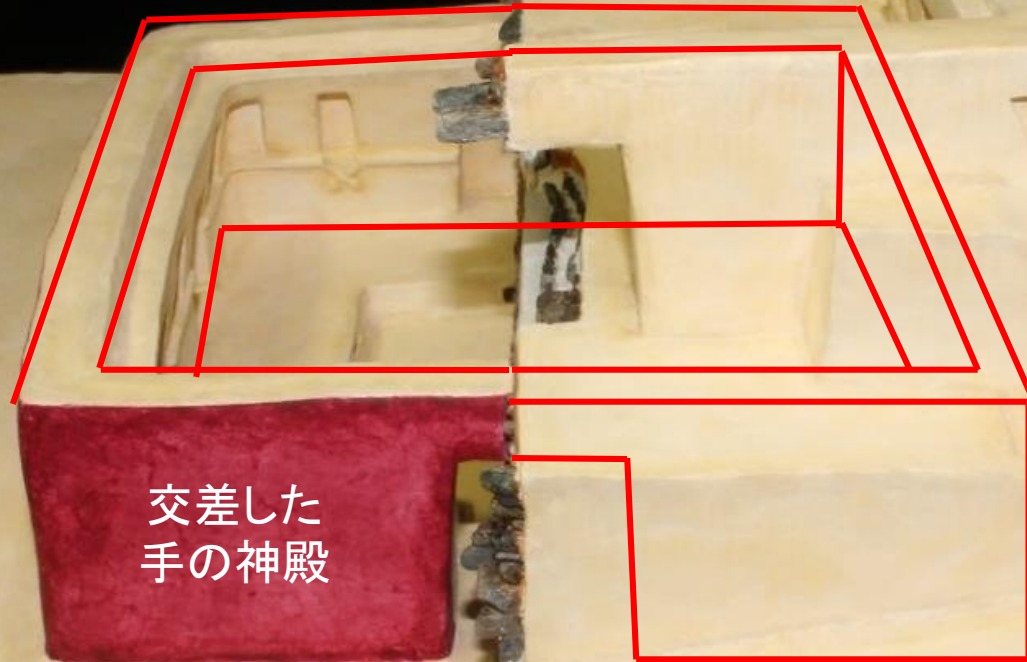
ベントロン遺跡と彩色壁画



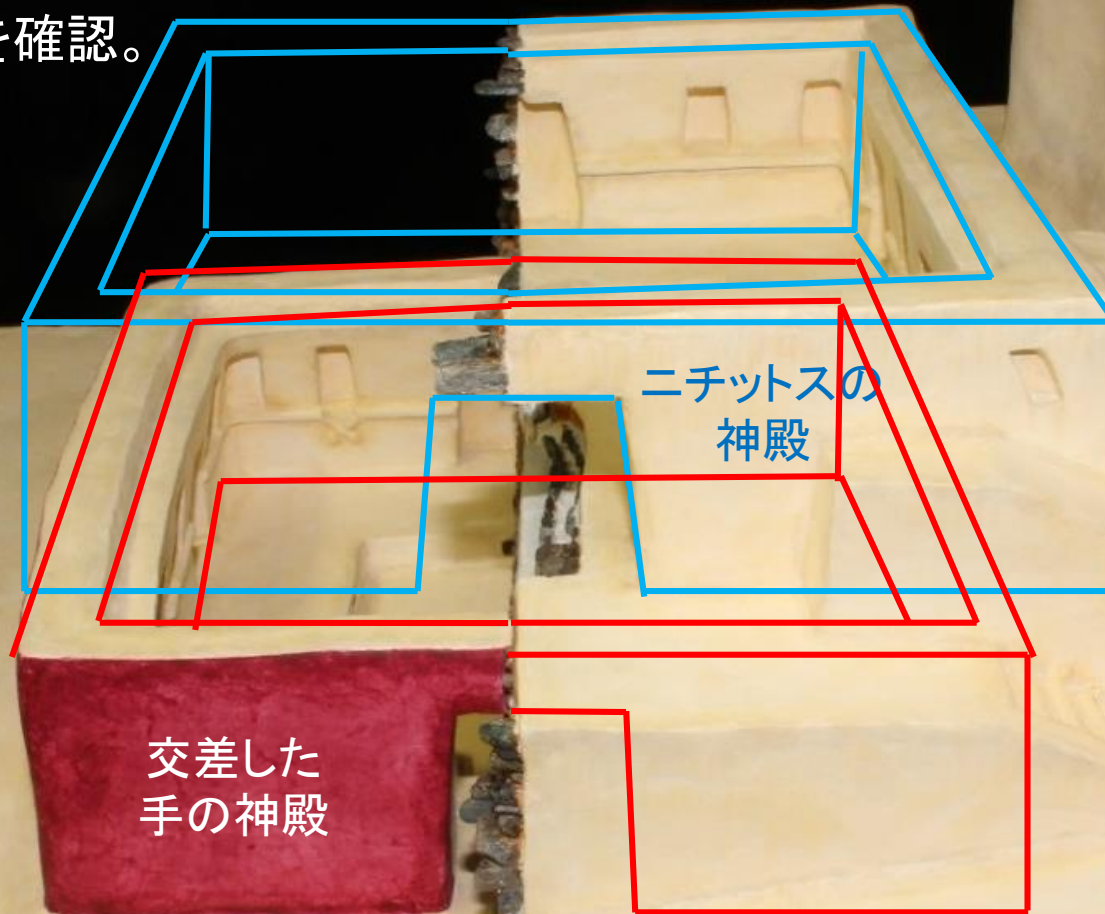
60年代、コトシュ遺跡の発掘 考古学上の大きな成果 2



神殿を埋めた上に新たな神殿を造る反復的な過程を確認。



神殿を埋めた上に新たな神殿を造る反復的な過程を確認。



ワカロマ遺跡（1979～1989年）

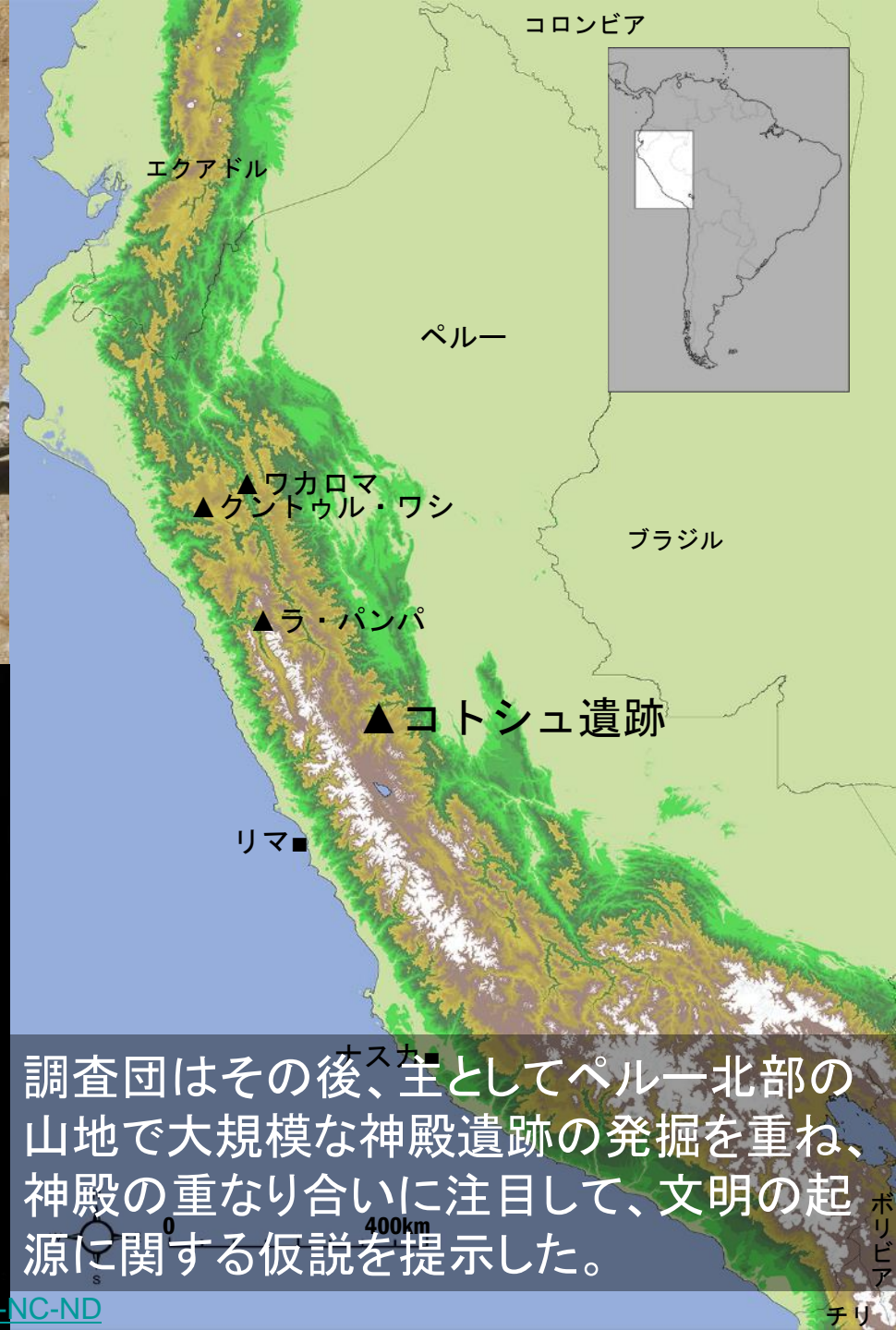


写真 東京大学アンデス調査団

クントウル・ワシ遺跡（1988年～）

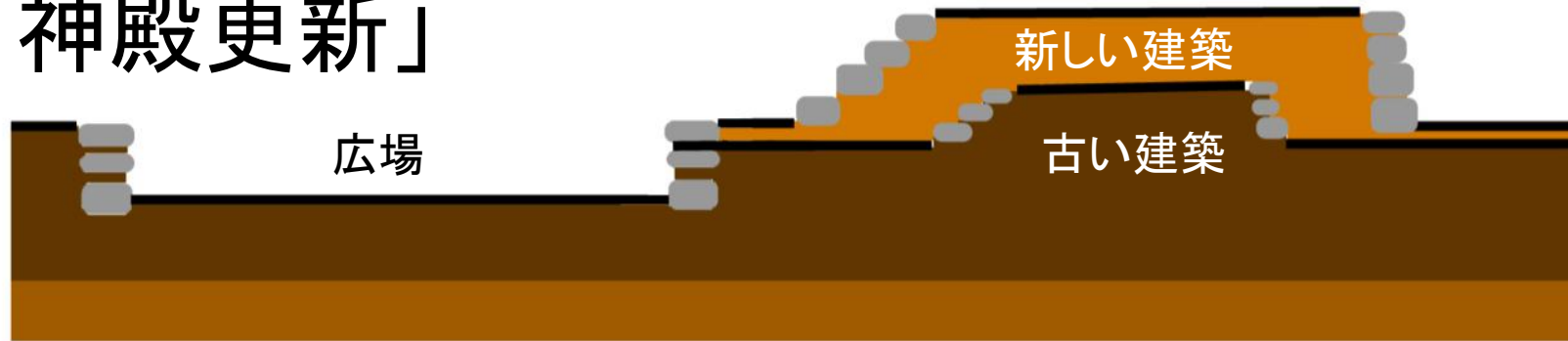


写真 クントウル・ワシ調査団



調査団はその後、主としてペルー北部の山地で大規模な神殿遺跡の発掘を重ね、神殿の重なり合いに注目して、文明の起源に関する仮説を提示した。

「神殿更新」



神殿を意図的に埋めるなどして、規模を大きくしていく儀礼。従来の建築を核にして一回り大きくしたり、いったん完全に埋めた上にほぼ同じ規模のものを再度作ったり、隣に継ぎ足していったりと様々なケースがあるが、一般的にこれにより神殿建築は次第に大きくなっていく。

その活動が人口増・食料増産・技術革新・思想の錬磨・儀礼の壮麗化などを刺激し、それによりさらなる更新が行われる。

神殿じたいに、アンデス文明形成の契機があったと考えられる。

著作権等の都合により、ここに挿入されていた画像を削除しました

書籍の表紙

大貫 良夫・加藤 泰建・関雄二 編『古代アンデス神殿から始まる文明』（朝日新聞出版、2010年）
https://publications.asahi.com/ecs/detail/?item_id=11212

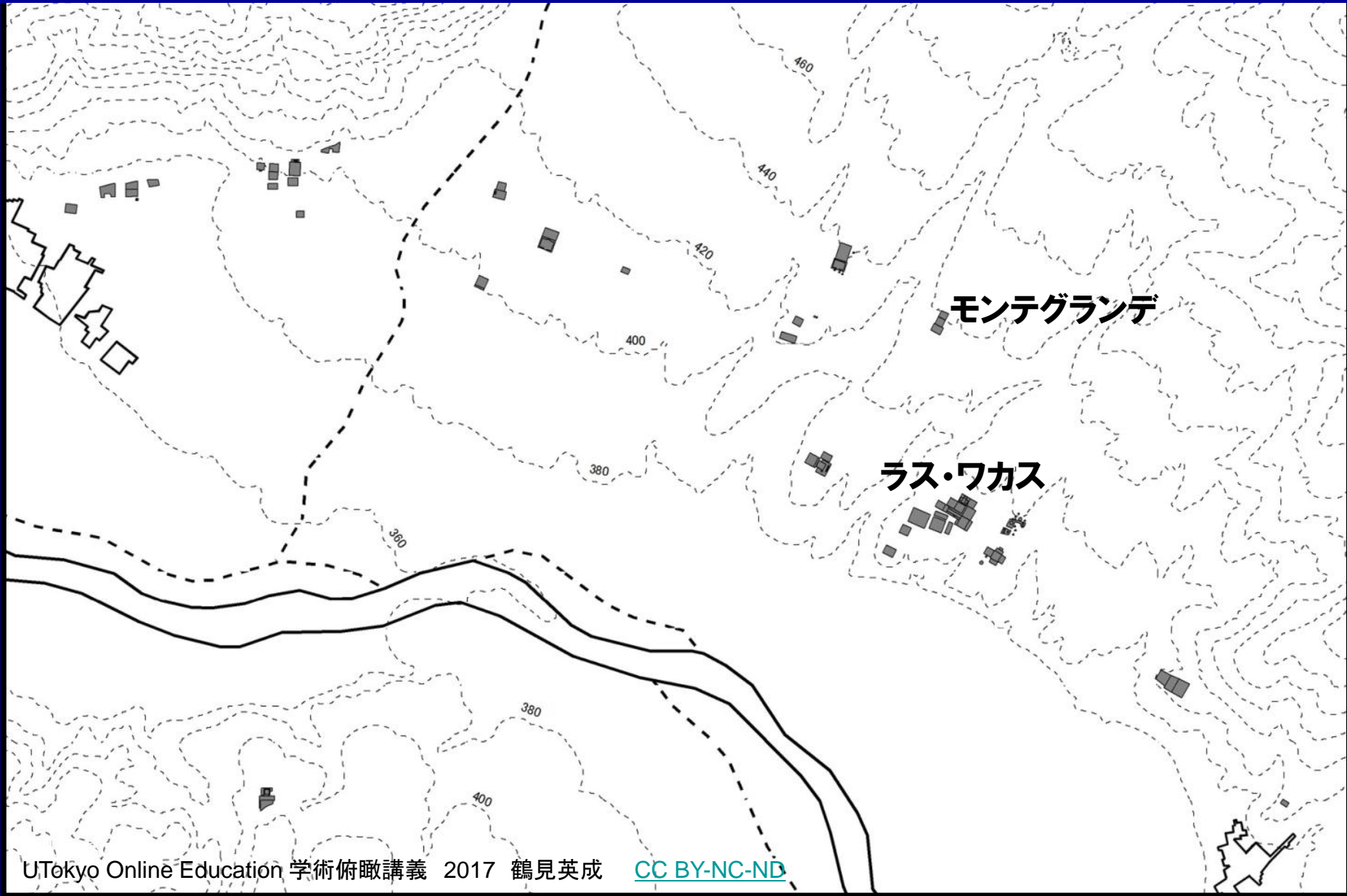
私の研究の拠点： ペルー北部、ヘケテペケ川中流域 テンブラデーラ地域の形成期遺跡群



2003,04,05,09,11,14,15年に発掘

北岸アマカス平原

大規模な基壇建築がマウンドとなって多数密集している。



Ravines 1981, Tellenbach 1986より改変
形成期の神殿が、これほど多数密集する事例は他にない。

どのような理由によって
神殿が発生したのか、さまざま
な切り口から手がかりが得られ
そうである。

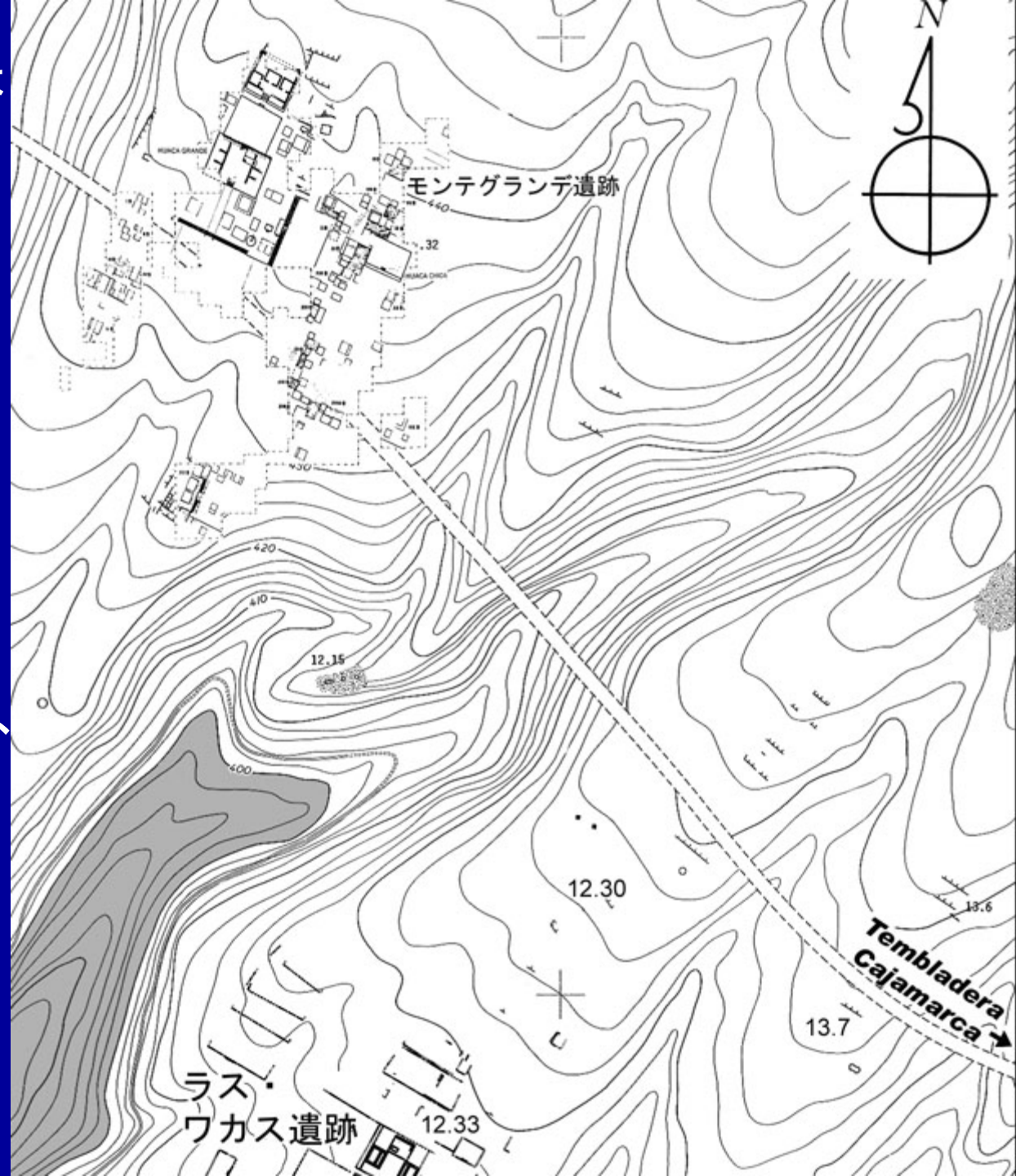
かつてドイツ隊が調査した
モンテグランデ遺跡は、「神殿を
家屋が取り囲む村落」という姿を、
実際に確認した唯一の事例。

そのすぐ近くのラス・ワカ
ス遺跡で発掘を開始。

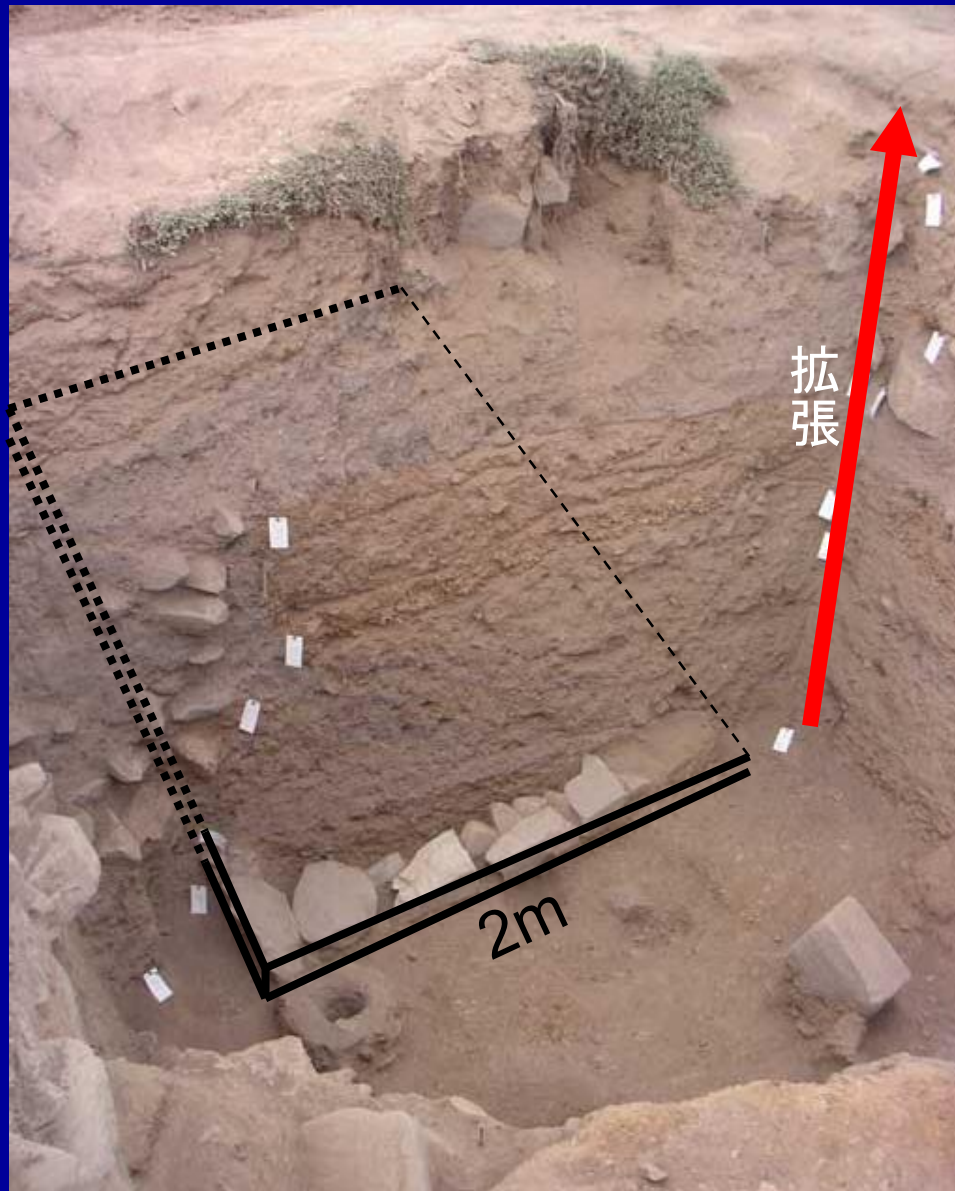
UTokyo Online Education 学術俯瞰講義

2017 鶴見英成

[CC BY-NC-ND](#)



ごく小規模な建築が、大規模な神殿に拡張された過程



ラス・ワカス遺跡の事例

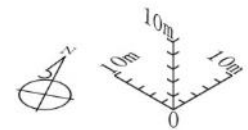
ラス・ワカス遺跡の神殿更新

-前期1-

Plataforma A1



Plataforma D4



小規模な基壇建築（住居）が散在

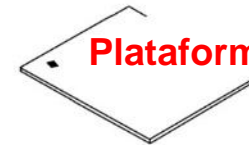
ラス・ワカス遺跡の神殿更新

-前期 2-

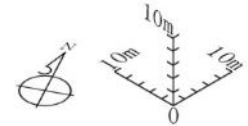
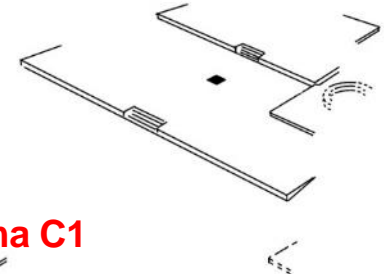
Plataforma A1



Plataforma C1

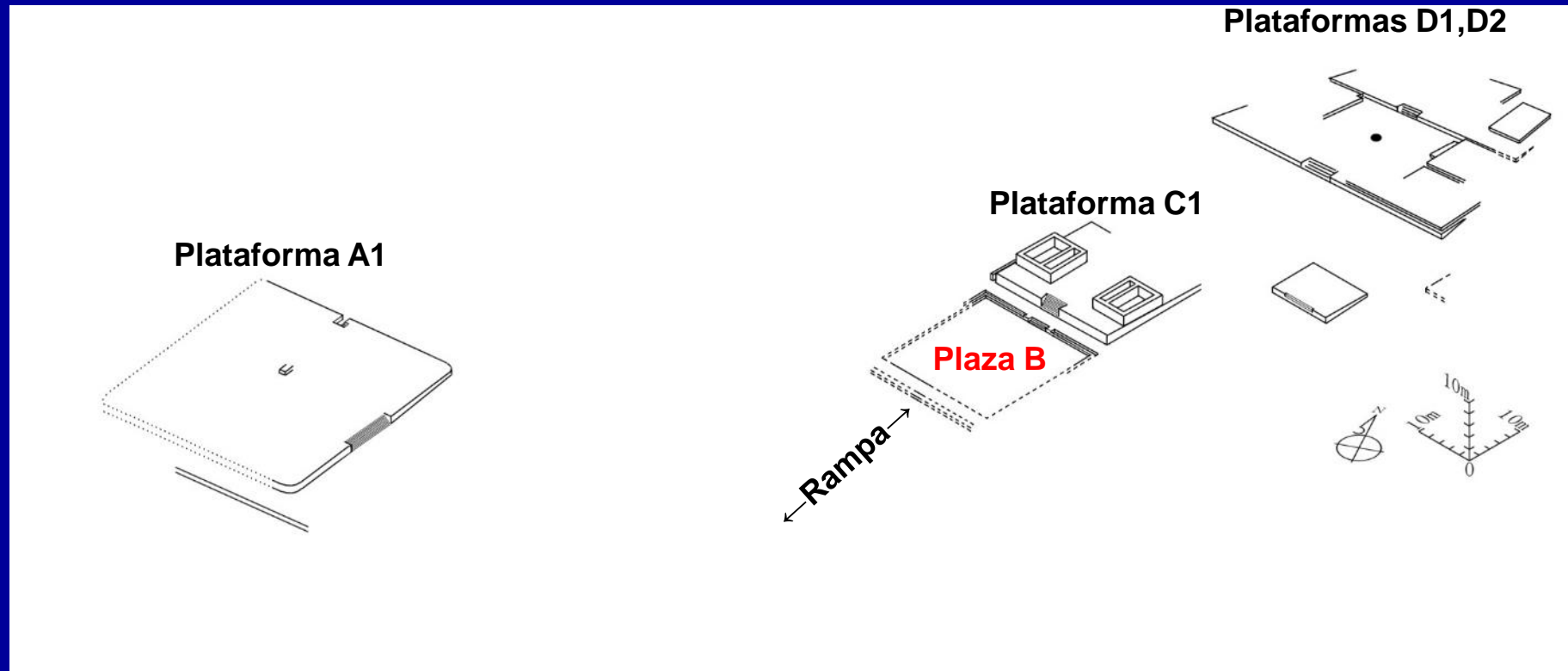


Plataformas D1,D2



拡張：やや大規模な基壇建築が成立

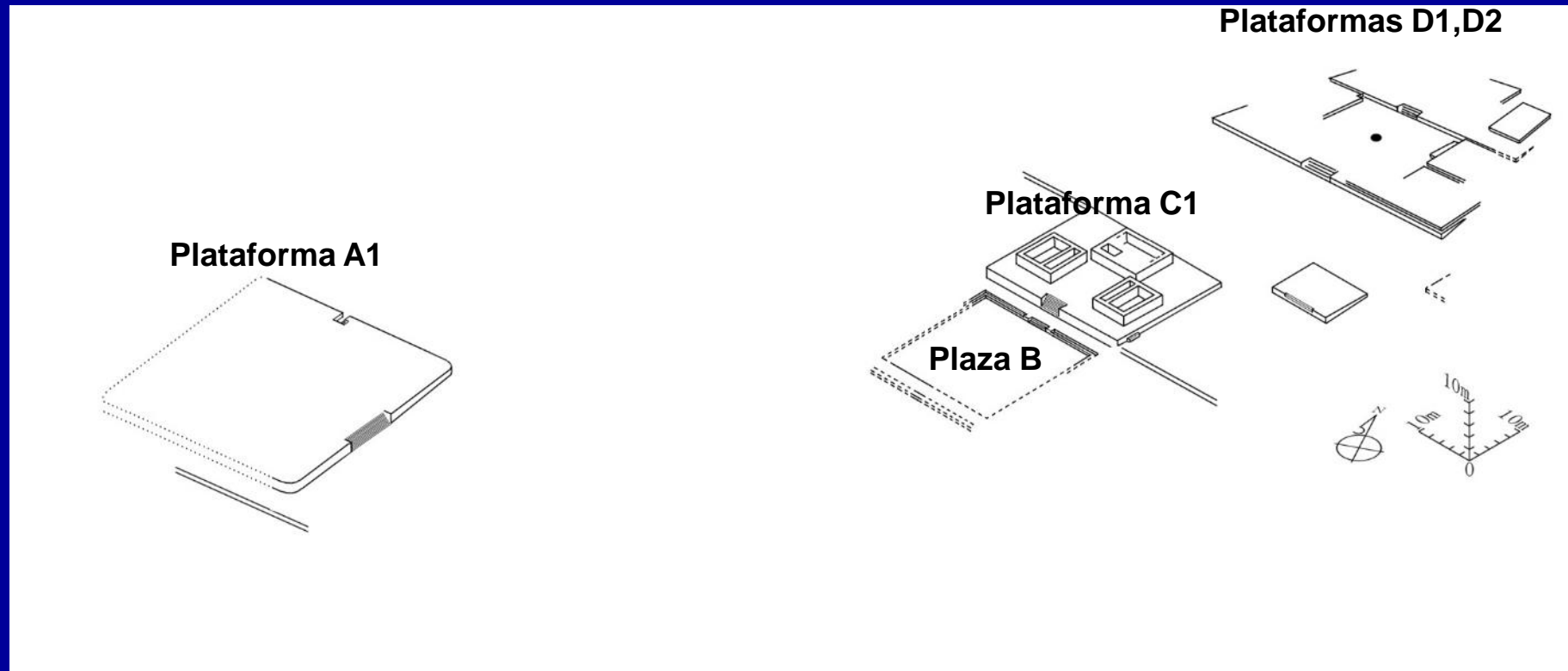
ラス・ワカス遺跡の神殿更新 -中期1a-



拡張：方形広場を擁する基壇複合の成立

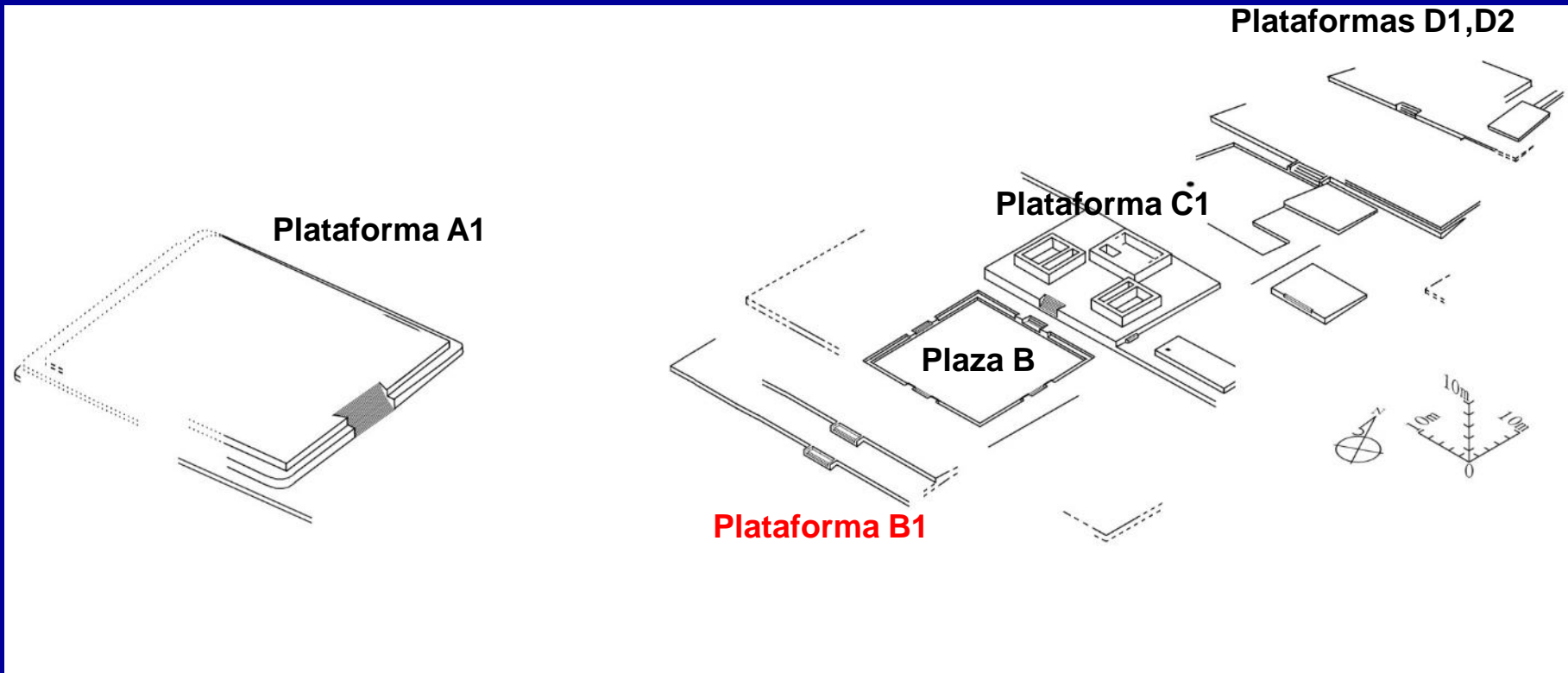
ラス・ワカス遺跡の神殿更新

-中期1b-



小規模な拡張

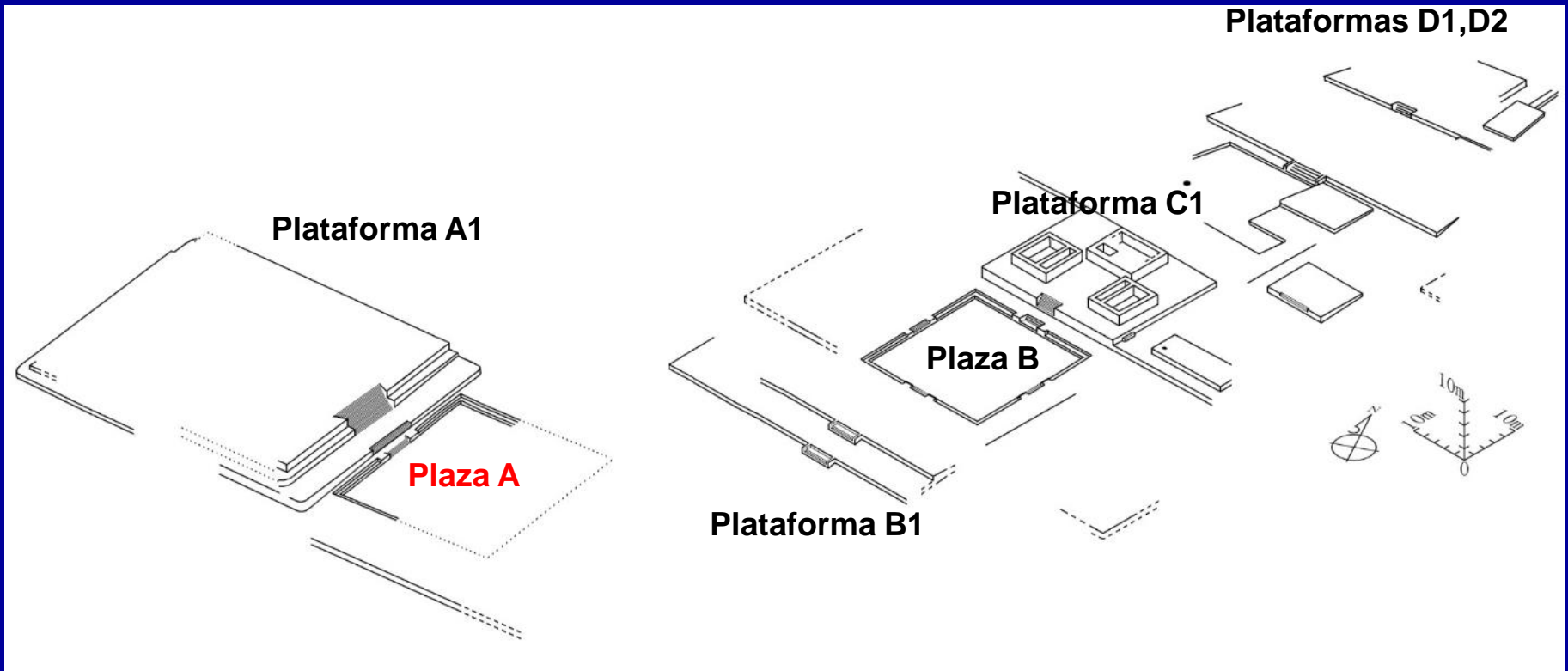
ラス・ワカス遺跡の神殿更新 -中期2a-



2つの地点それぞれで基壇が拡張される

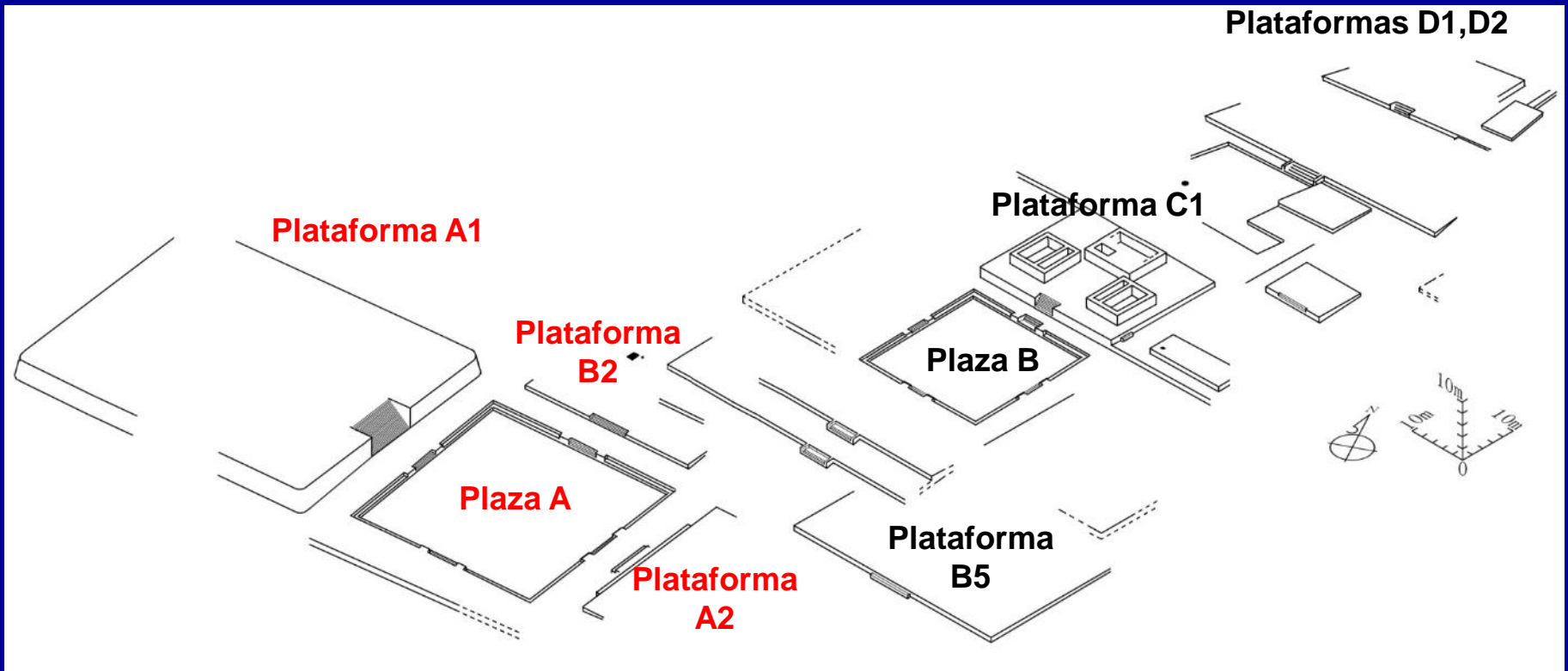
ラス・ワカス遺跡の神殿更新

-中期2b-



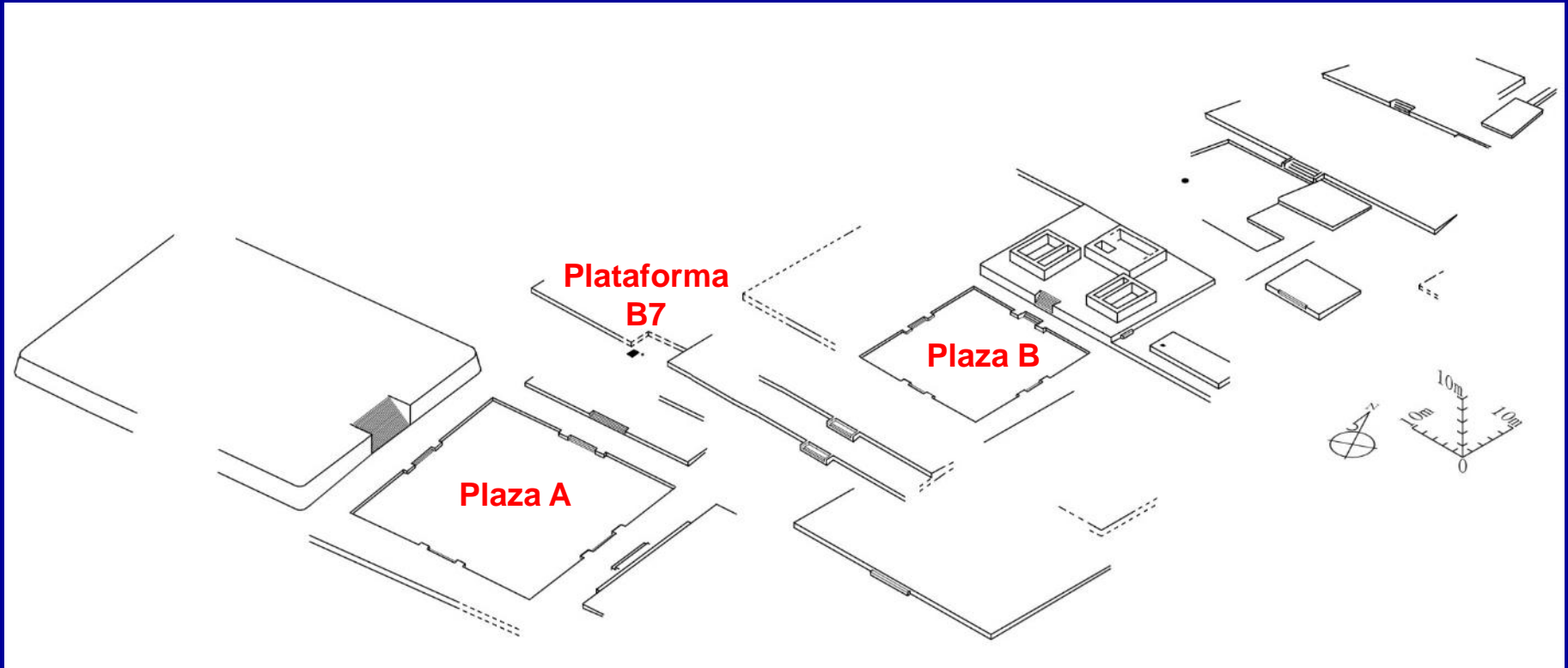
2つの広場が成立

ラス・ワカス遺跡の神殿更新 -中期2c-



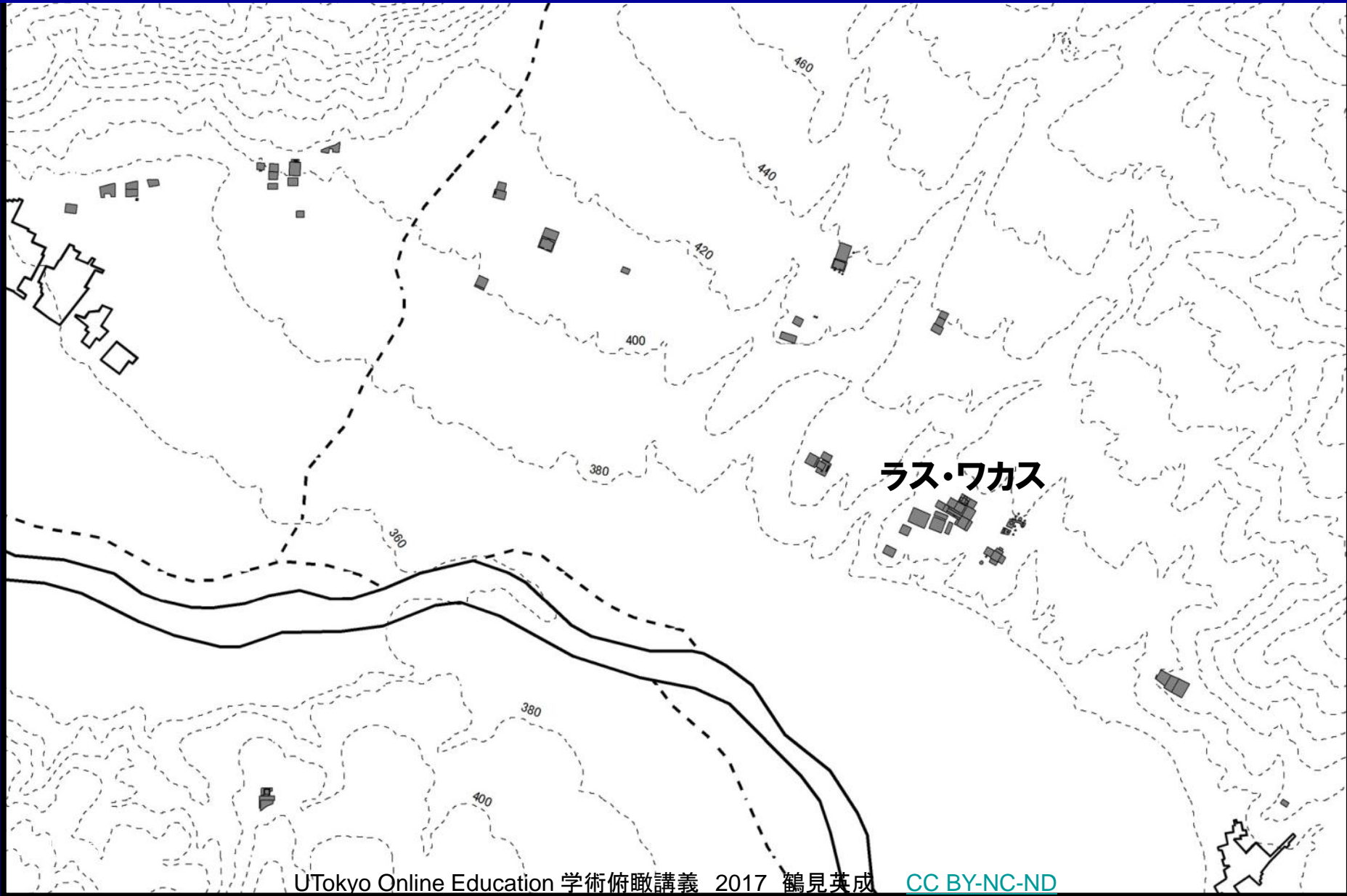
全体が接続され、単一の建築複合へ

ラス・ワカス遺跡の神殿更新 -中期2d-



小規模な拡張、部分的に未完成のまま放棄

ラス・ワカス(Las Huacas)はもともとこの一帯の地名。
大規模なマウンド遺跡(ワカ)が多数密集している。



ラス・ワカスー一帯の神殿群

①1500-1450 calBC (形成期前期1)

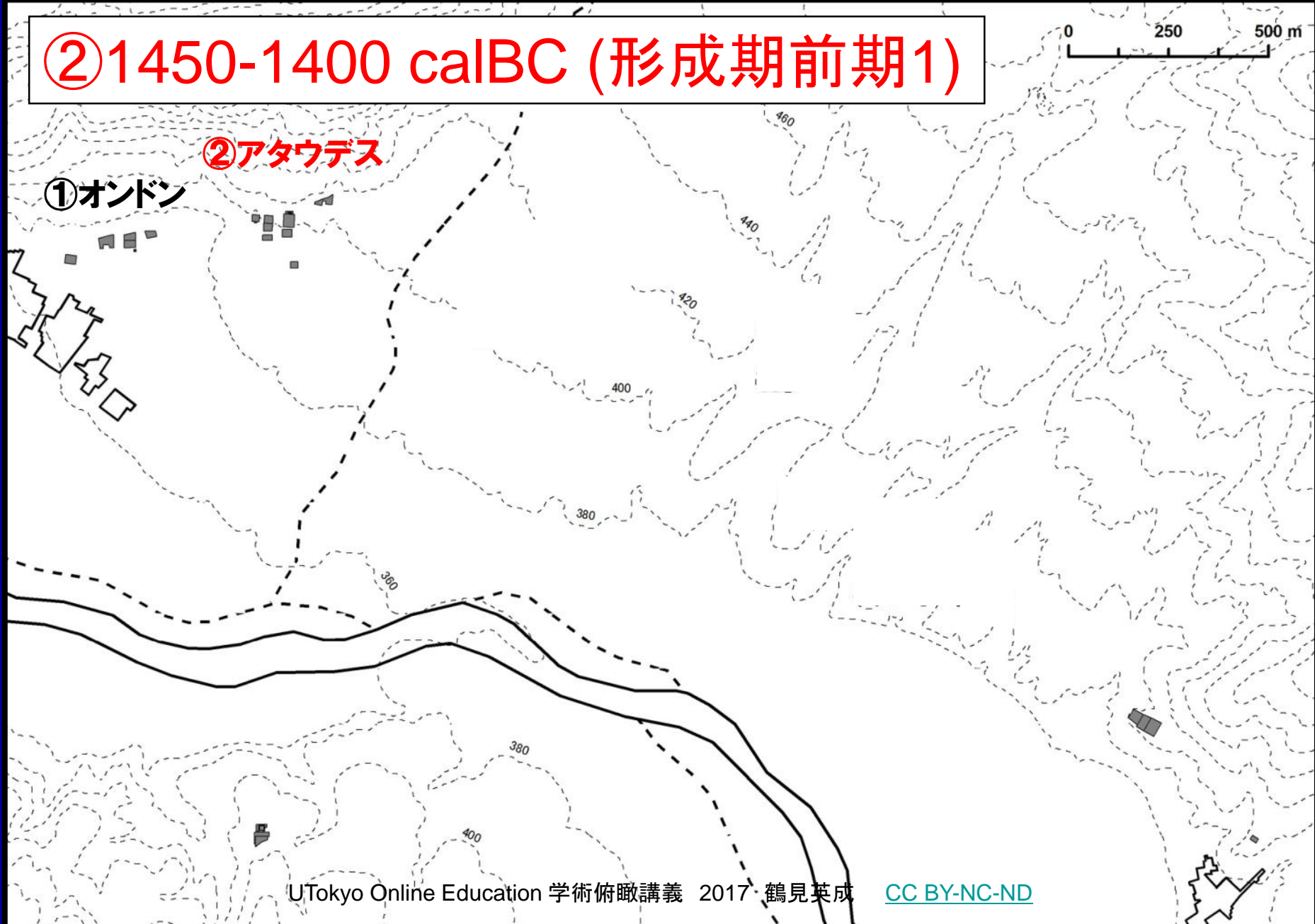
①オンドン

土器の示唆する年代、建築の形体が徐々に移り変わる様子、放射性炭素絶対年代測定の結果などを総合して、仮説を立てた。

0 250 500 m

ラス・ワカスー一帯の神殿群

②1450-1400 calBC (形成期前期1)



ラス・ワカス一帯の神殿群

③1425-1375 calBC (形成期前期1)

0 250 500 m

①オンドン

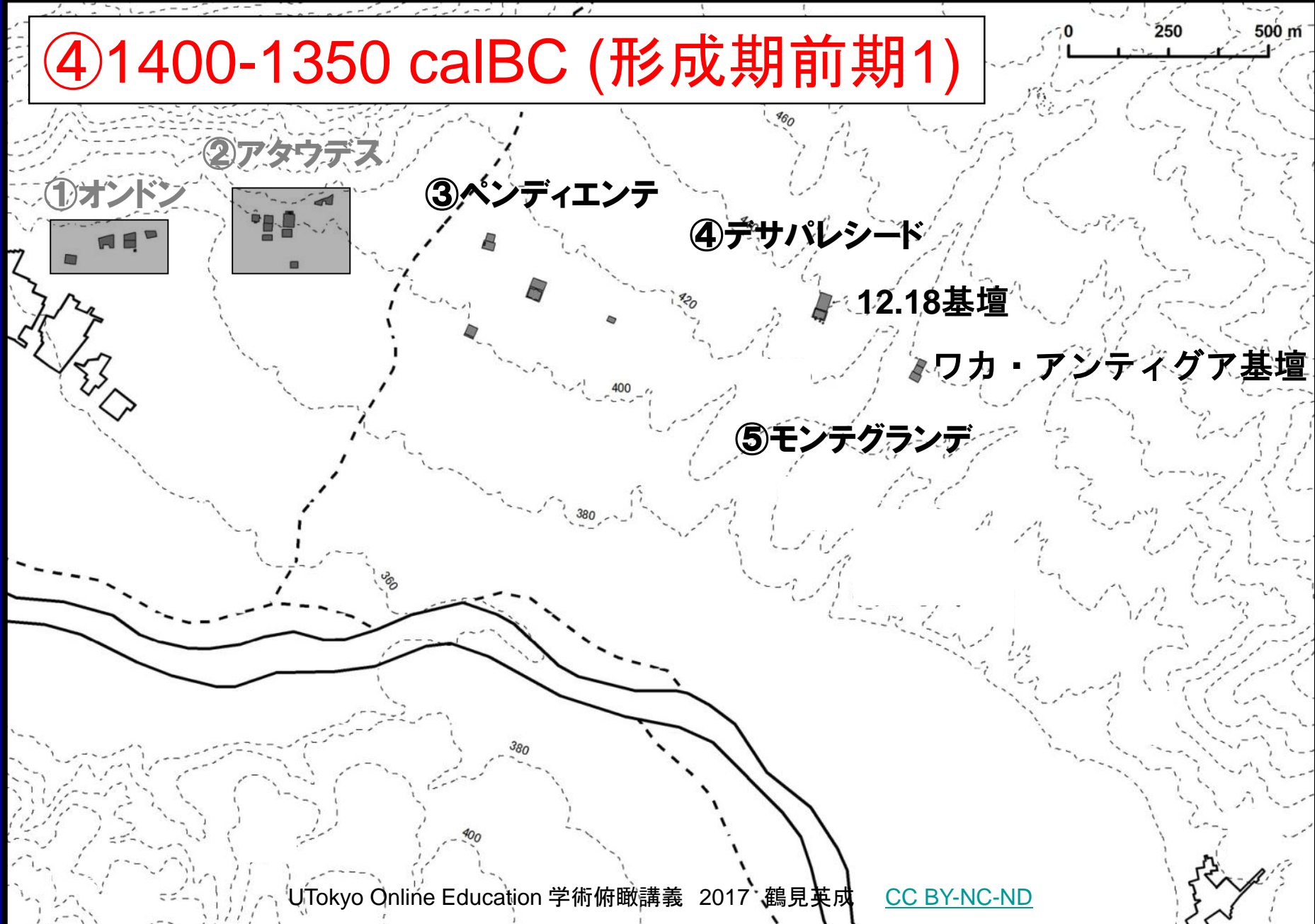
②アタウデス

③ペンディエンテ

古い神殿から順に「放棄」
もしくは「閉鎖」される

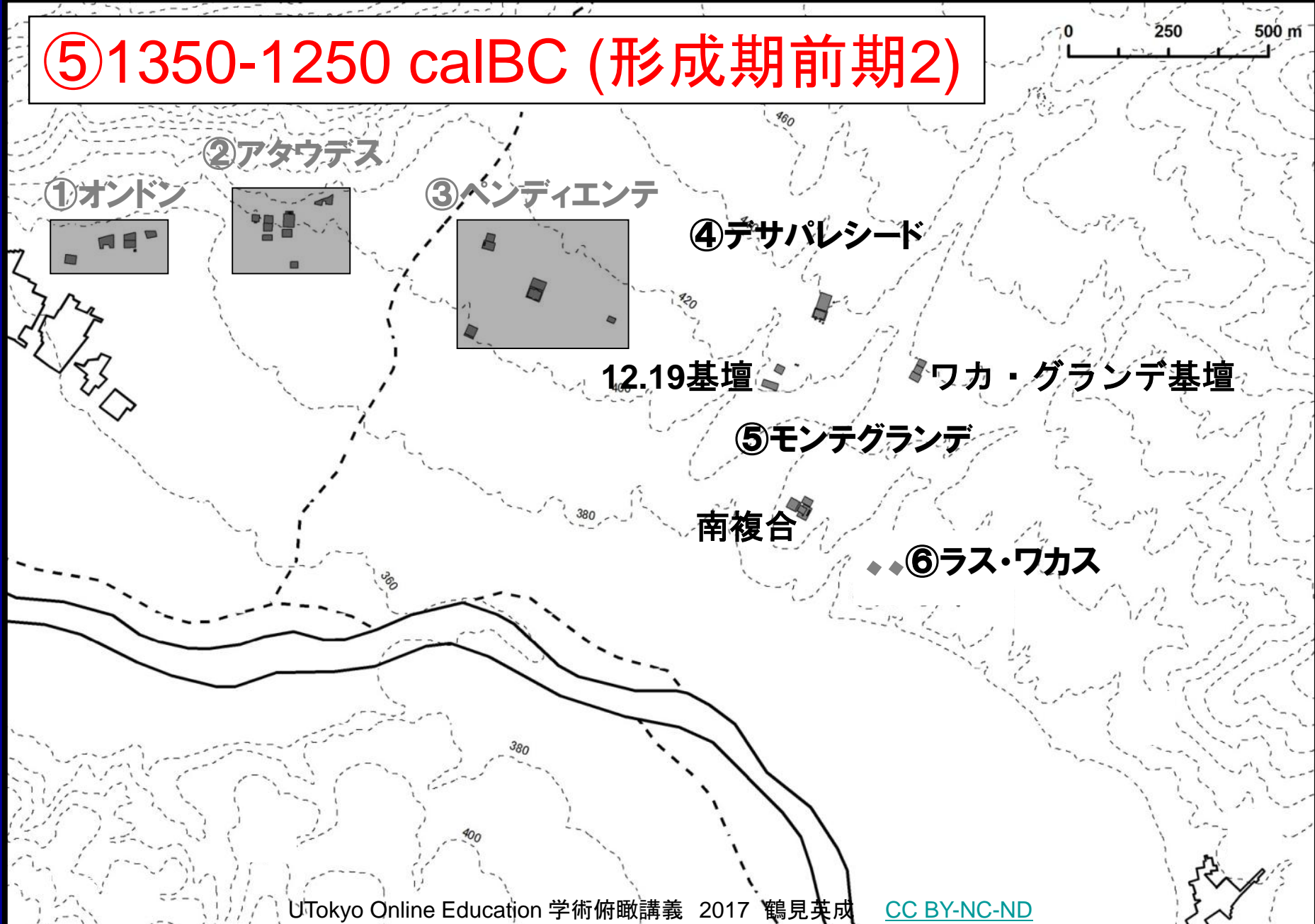
ラス・ワカスー一帯の神殿群

④1400-1350 calBC (形成期前期1)



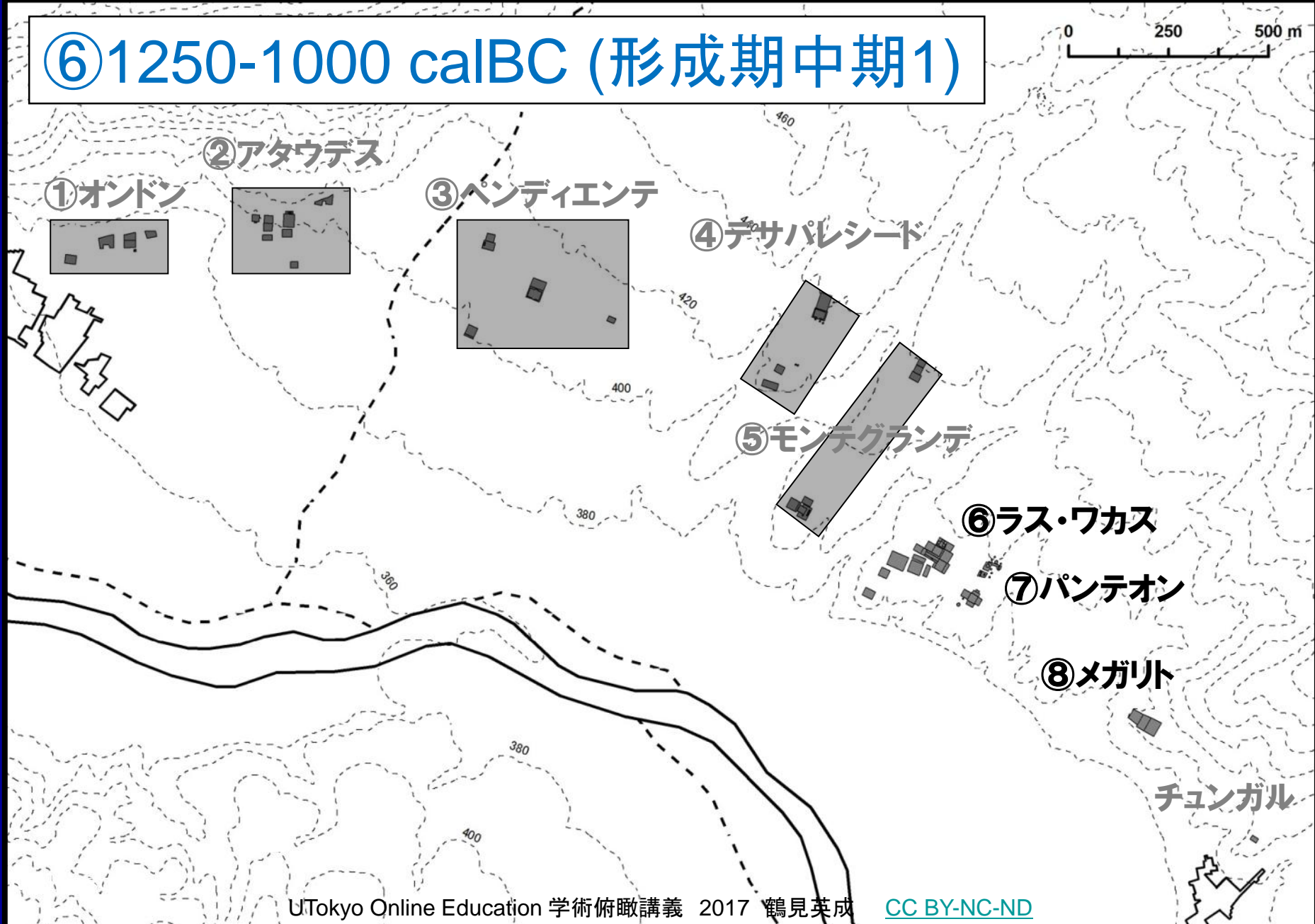
ラス・ワカス一帯の神殿群

⑤1350-1250 calBC (形成期前期2)



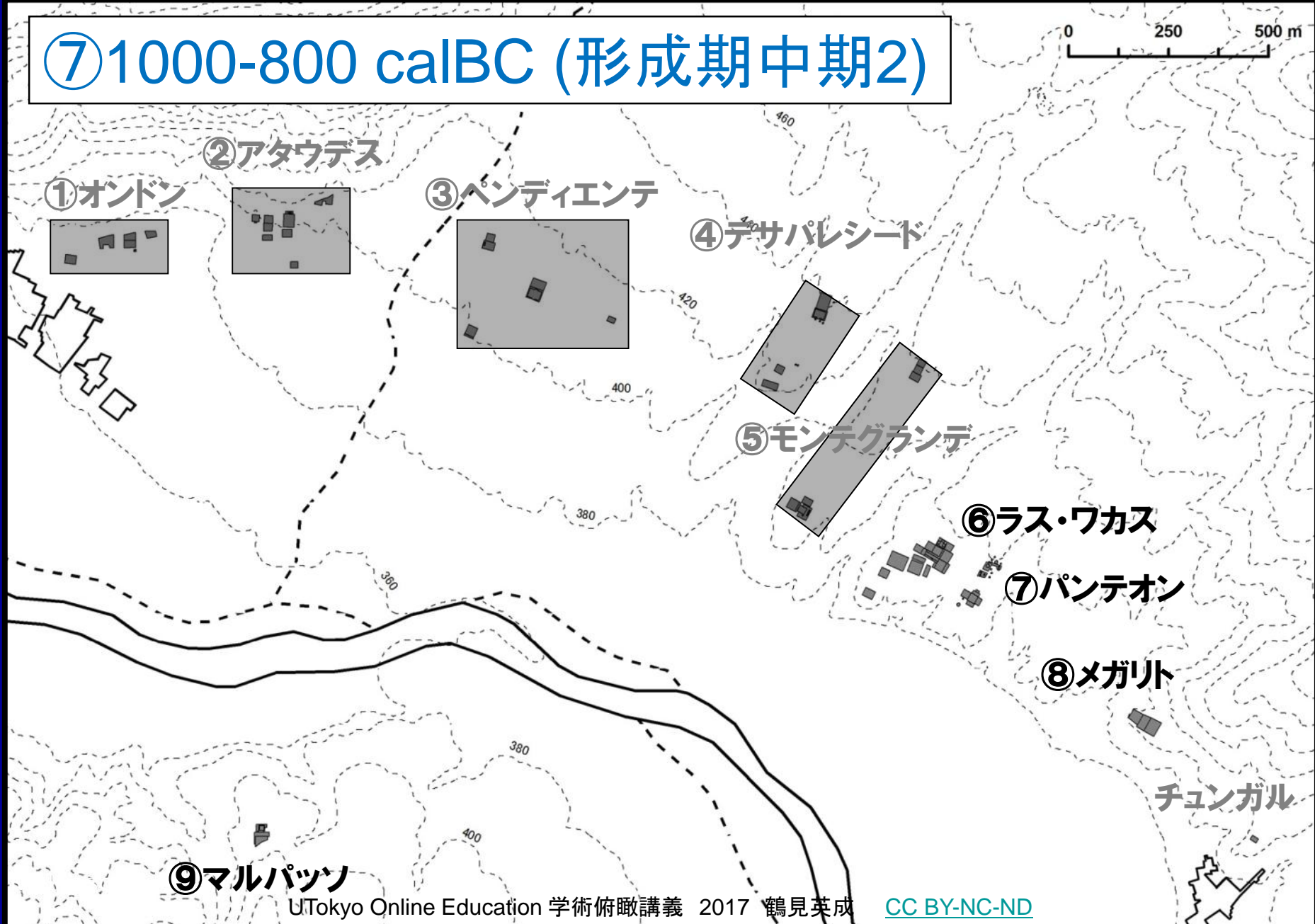
ラス・ワカス一帯の神殿群

⑥1250-1000 calBC (形成期中期1)



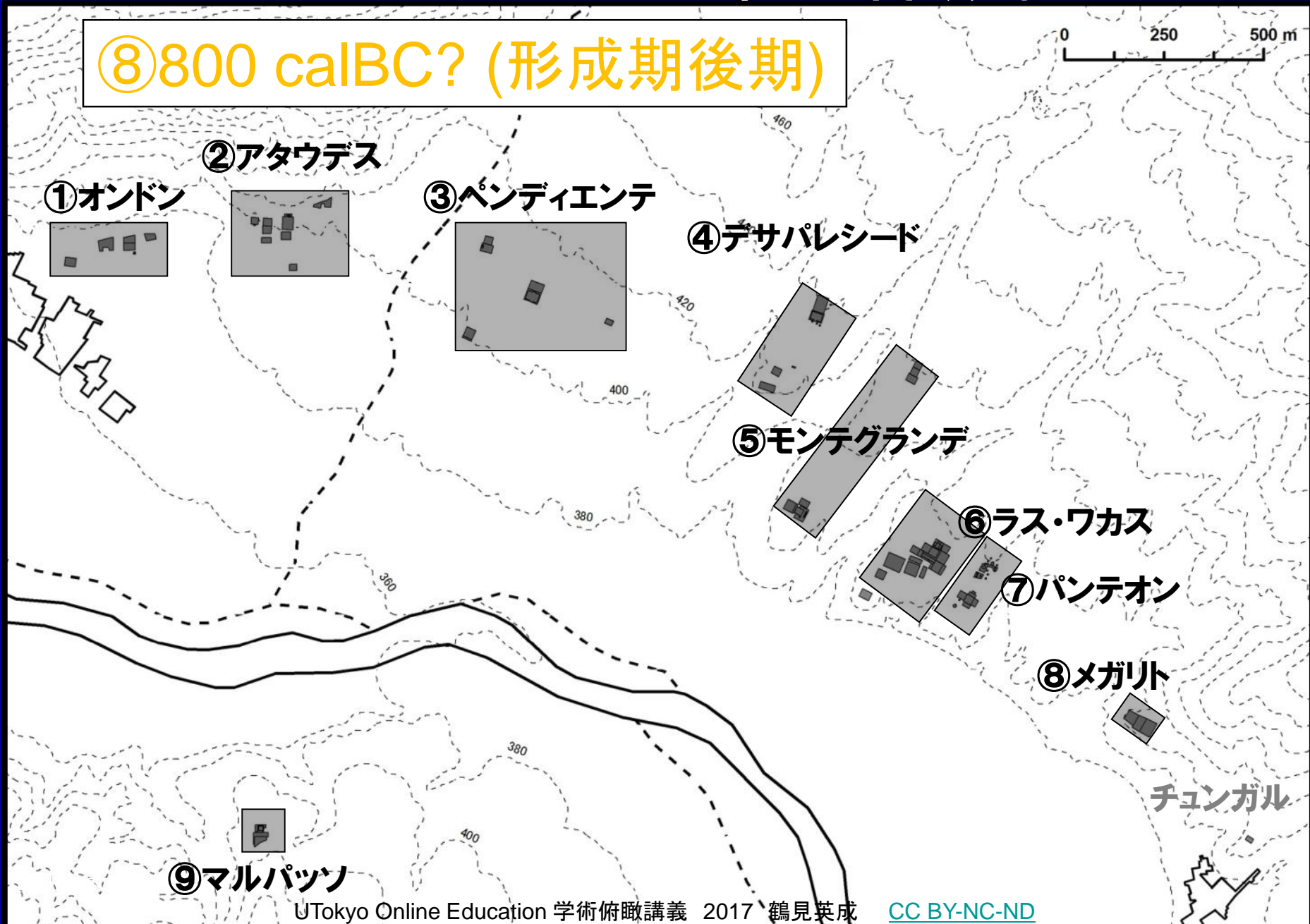
ラス・ワカス一帯の神殿群

⑦1000-800 calBC (形成期中期2)



ラス・ワカス一帯の神殿群

⑧800 calBC? (形成期後期)

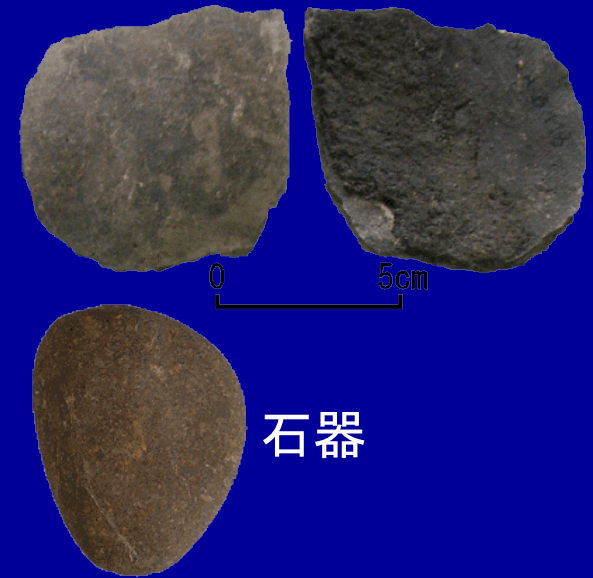


水資源と神殿

土器・石器の表面から
採取されたデンプンから、
農業が重要であったことが
わかった

土器外面

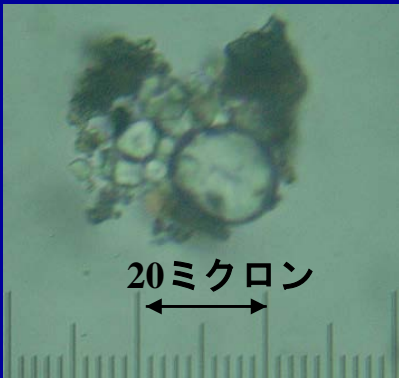
内面



顕微鏡写真(400x)

マニオク

Manihot esculente



トウモロコシ

Zea mays



ジャガイモ

Solanum tuberosum





水害と神殿



ラス・ワカス遺跡では、山から下ってくるワイコ（鉄砲水）で建築がたびたび破壊されていたこと、そのたびに再建されていたことを確認した。

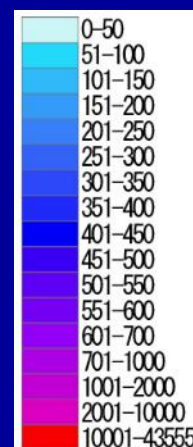
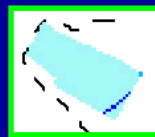
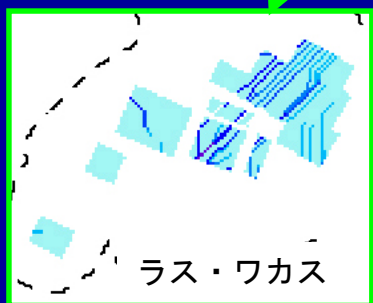
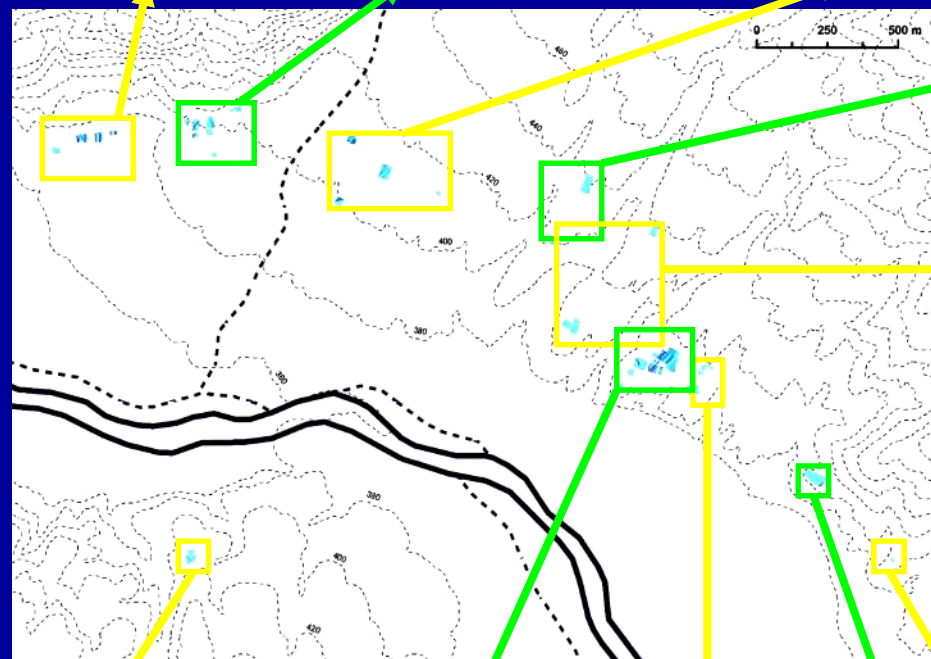
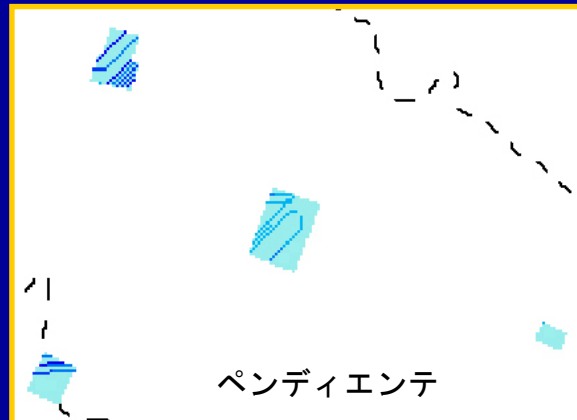
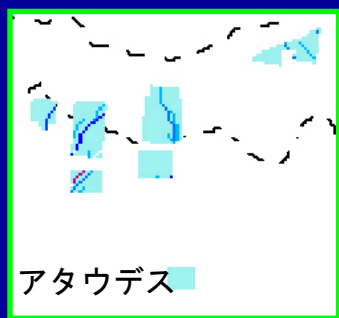
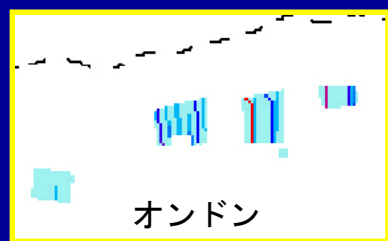
石造の堅牢な神殿建築が破壊されているため、居住用の簡素な建物はさらに被害が大きかったと考えられる。

1998年、エル・ニーニョ現象の際の ワイコによる被害

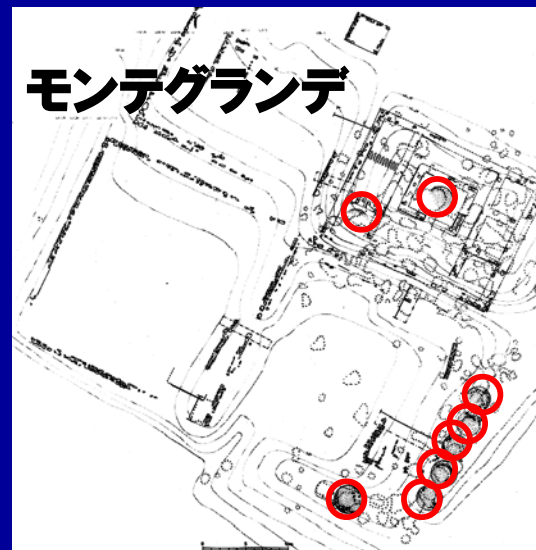
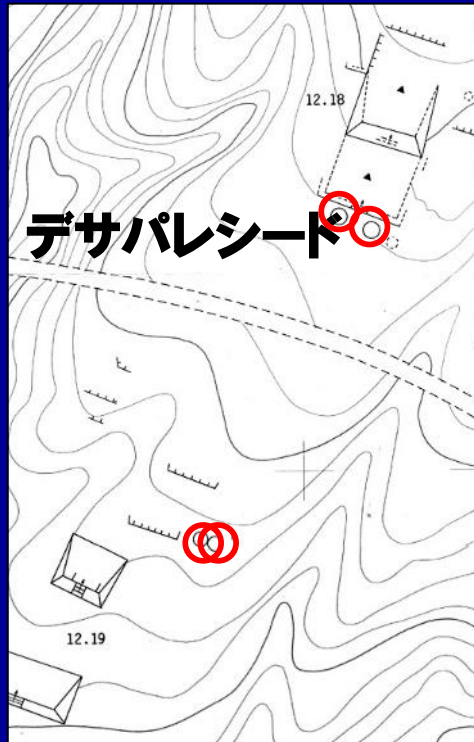
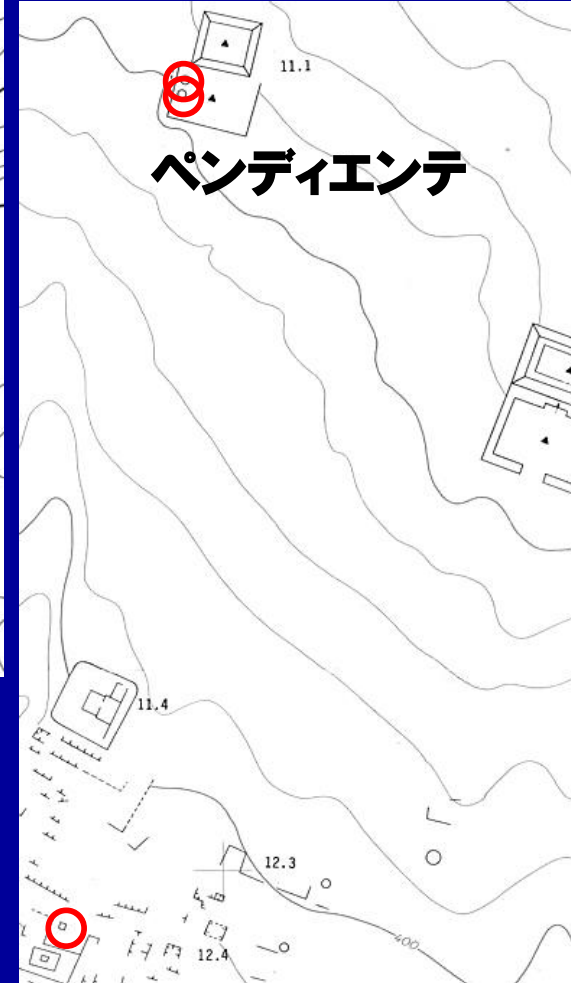
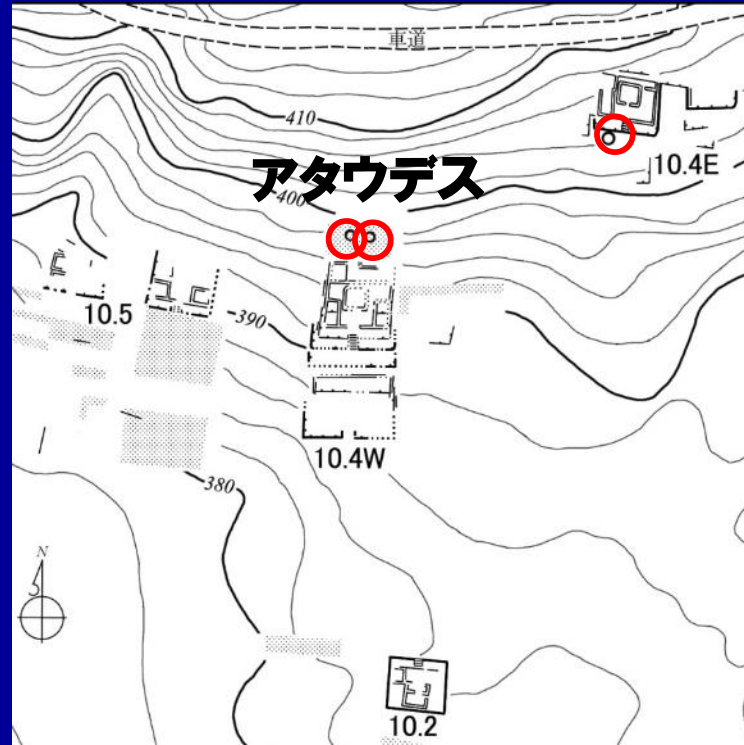
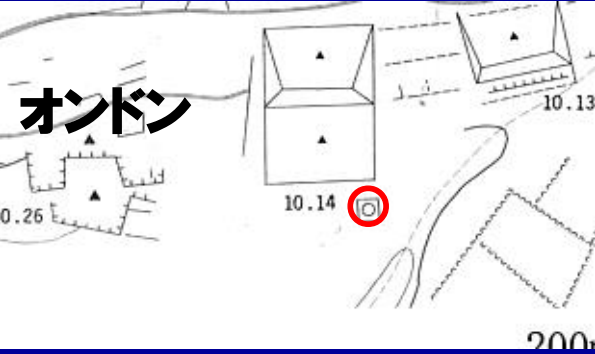
著作権等の都合により、
ここに挿入されていた画像を削除しました

ワイコによる被害・地図
Google Earth
座標: 7° 13'17.87"S 79° 09'04.03"W

西側の古い神殿ほど 水に弱い



水害から逃げるためだけに移転したのだろうか？

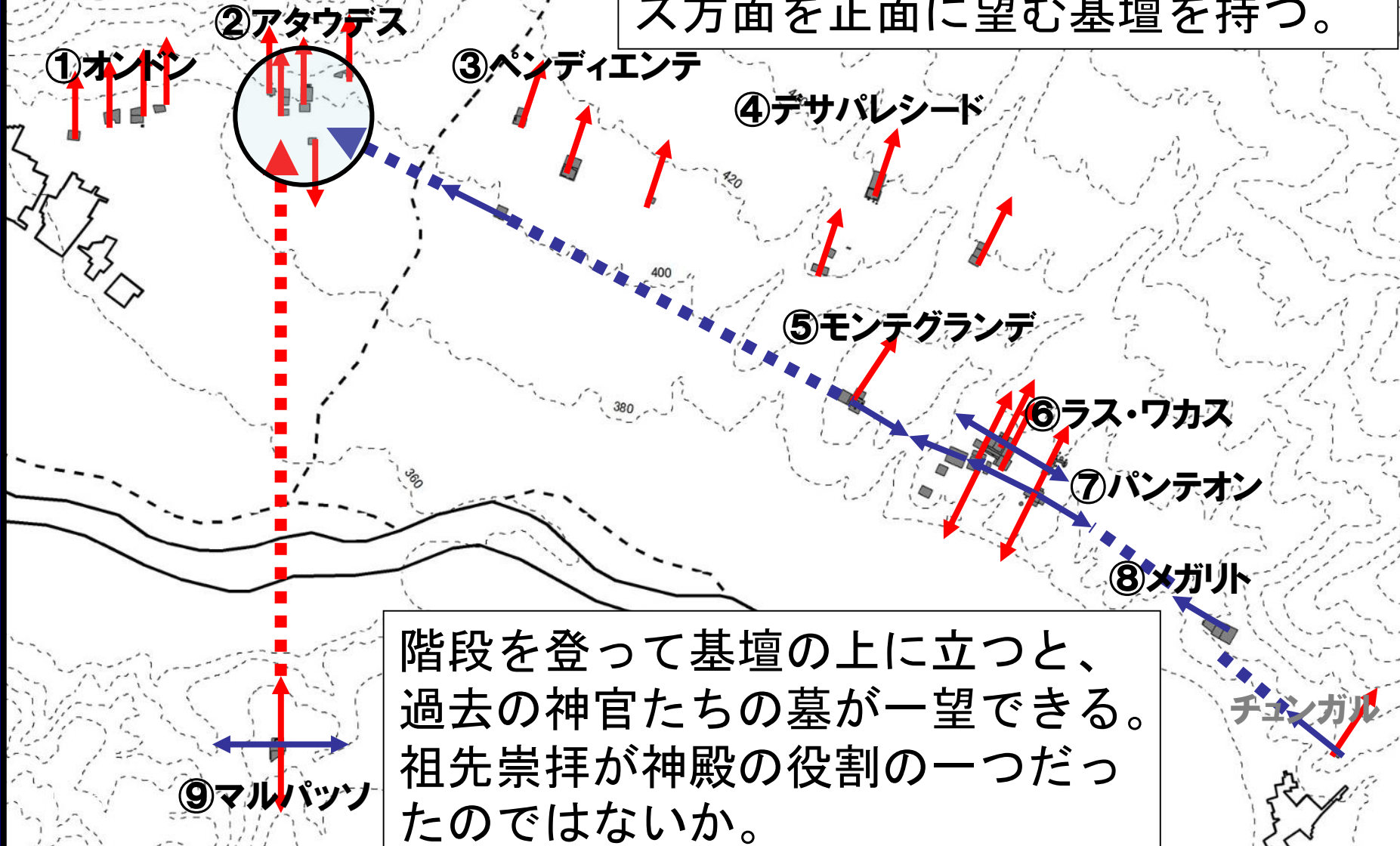


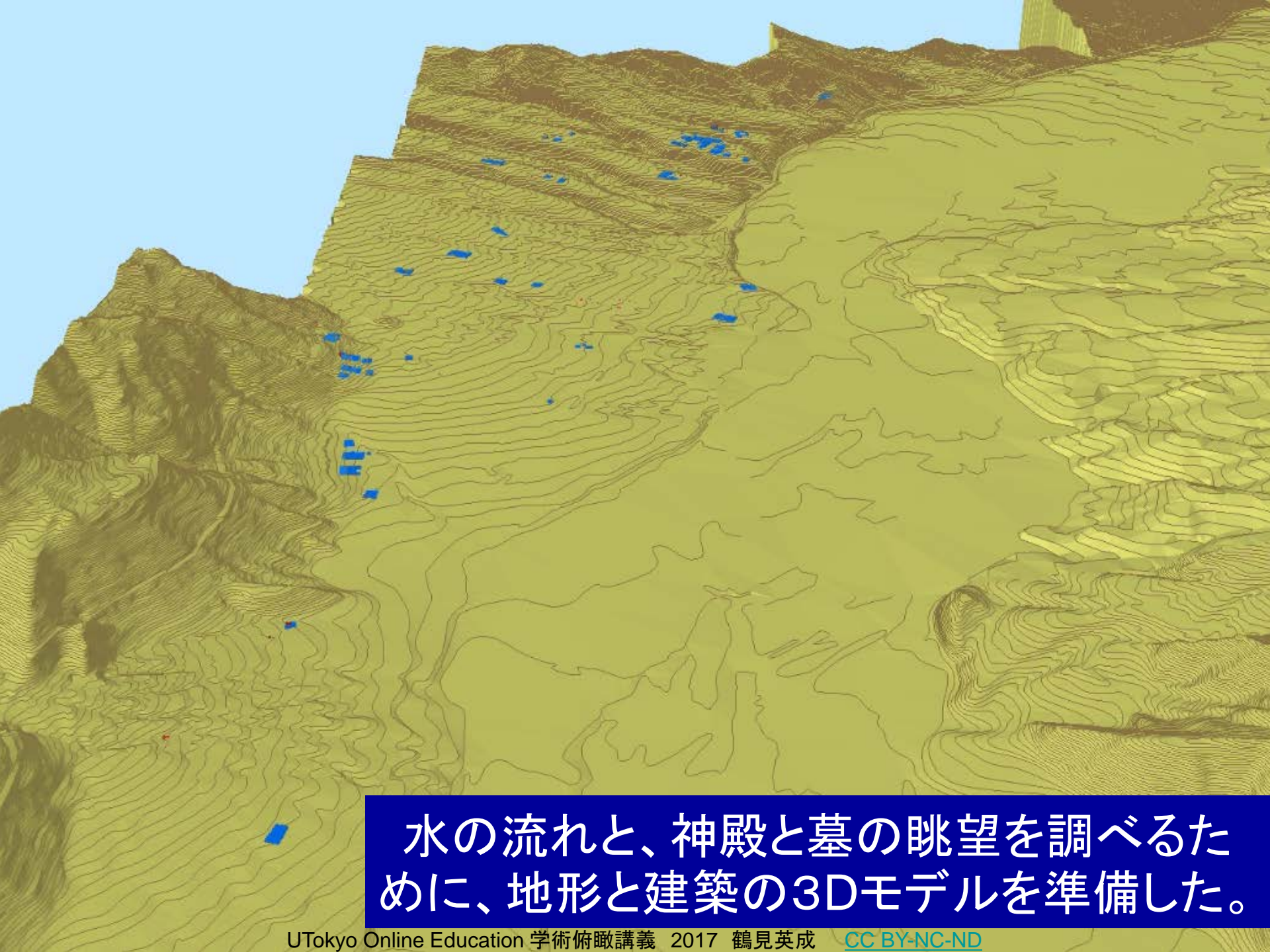
神殿を使わなくする
際に、大きな墓をそばに添え
ている。

神殿からの眺望：階段の方向

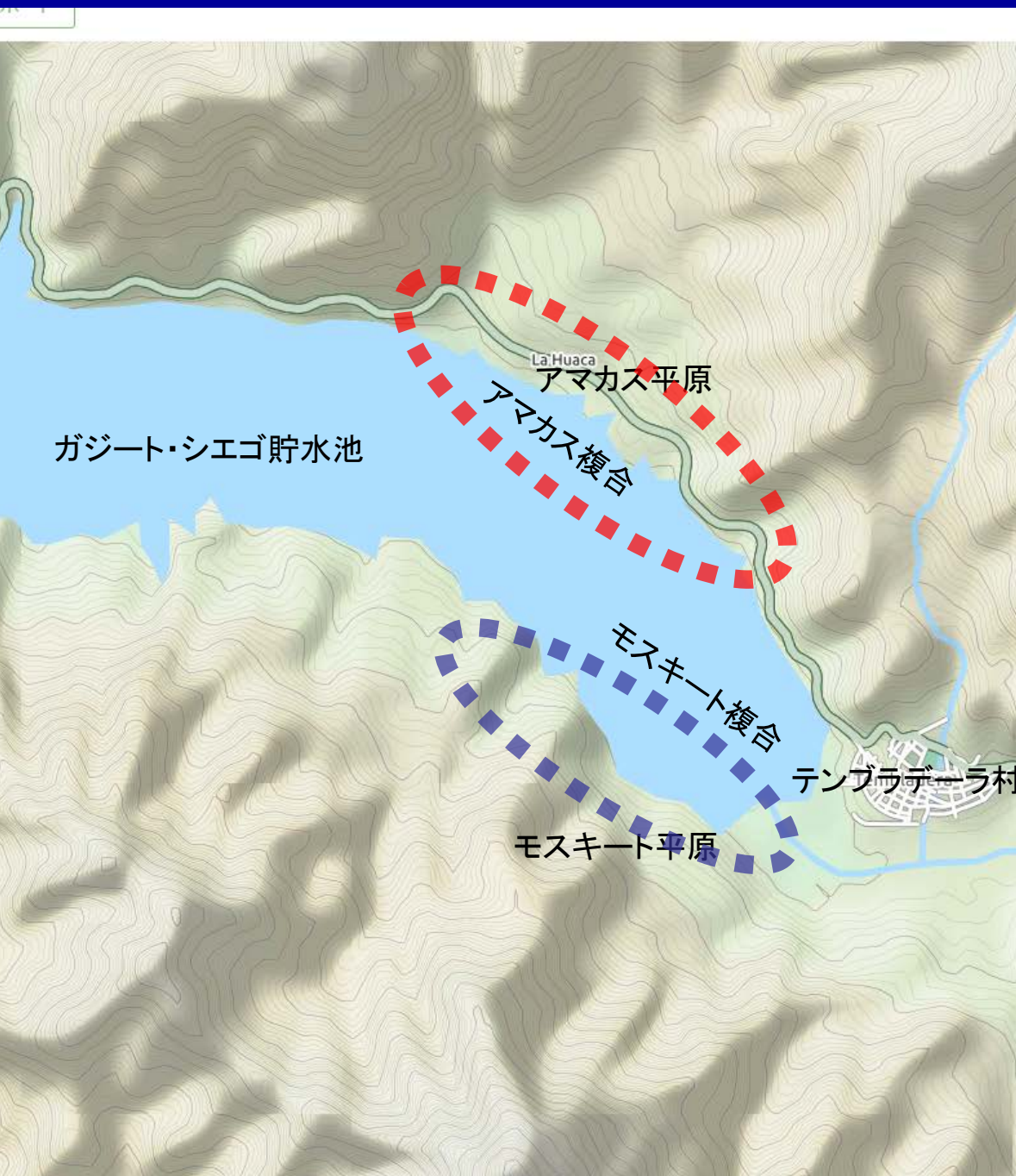
UTokyo Online Education 学術俯瞰講義
2017 鶴見英成 [CC BY-NC-ND](#)

すべての時期を通じ、階段の配置と方向に連続性があり、アタウデス方面を正面に望む基壇を持つ。





水の流れと、神殿と墓の眺望を調べるために、地形と建築の3Dモデルを準備した。



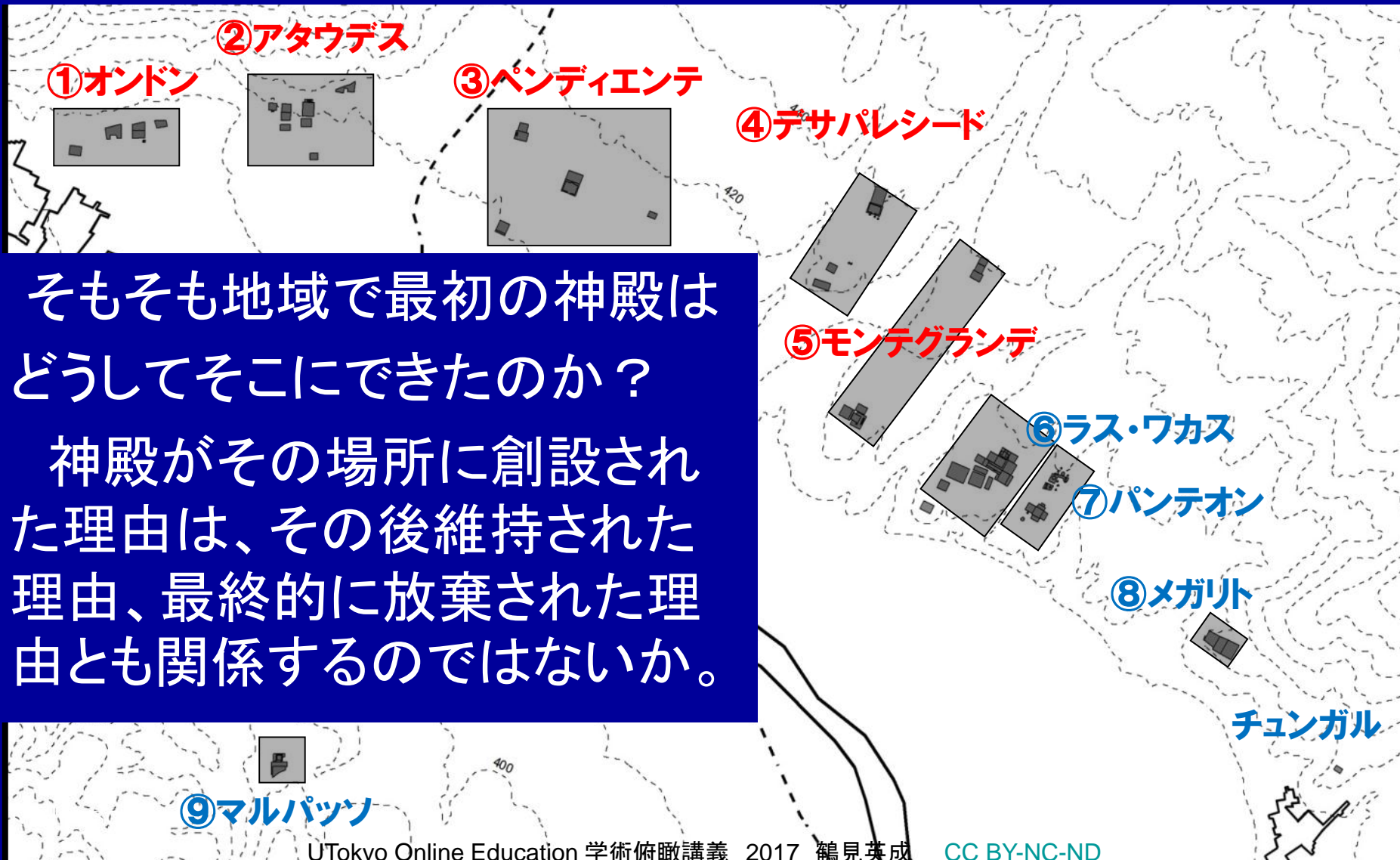
ガジート・シエゴ貯水池
1980年代に下流域の農業用水を確保するために築造された。

事前調査プロジェクトが2件実施されたが、膨大な面積に広がる遺跡群から、十分なデータをとったとは言いがたい。

居住、自然災害といった古代の地域社会全体を扱う研究に対して大きな障壁となっている。

(c)OpenStreetMap contributors


ラス・ワカス一帯ではひとつ神殿が建ち、
それを踏まえて次の神殿が建つという連鎖が見られた。
「最初の神殿」は後代まで影響を残す。



1980年代に造られた貯水池により
北岸の村と切り離された
無人の荒野 モスキート平原

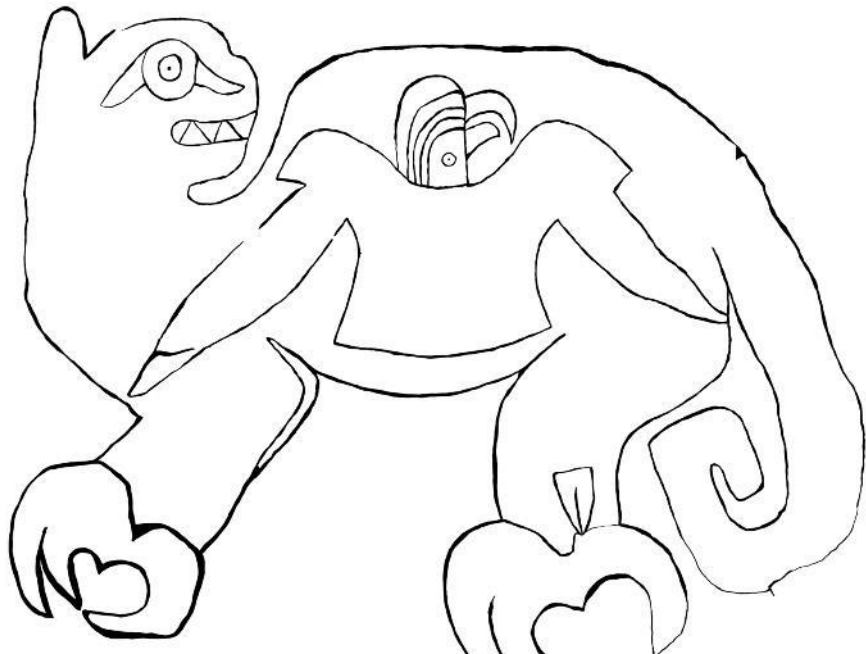
遺跡にはボートで通う





調査のきっかけとなったのは
土器より古い美術様式に属する
「フェリーノ（ネコ科動物）」の
ペトログリフ（線刻岩絵）であった

調査のきっかけとなったのは
土器より古い美術様式に属する
「フェリーノ（ネコ科動物）」の
ペトログリフ（線刻岩絵）であった

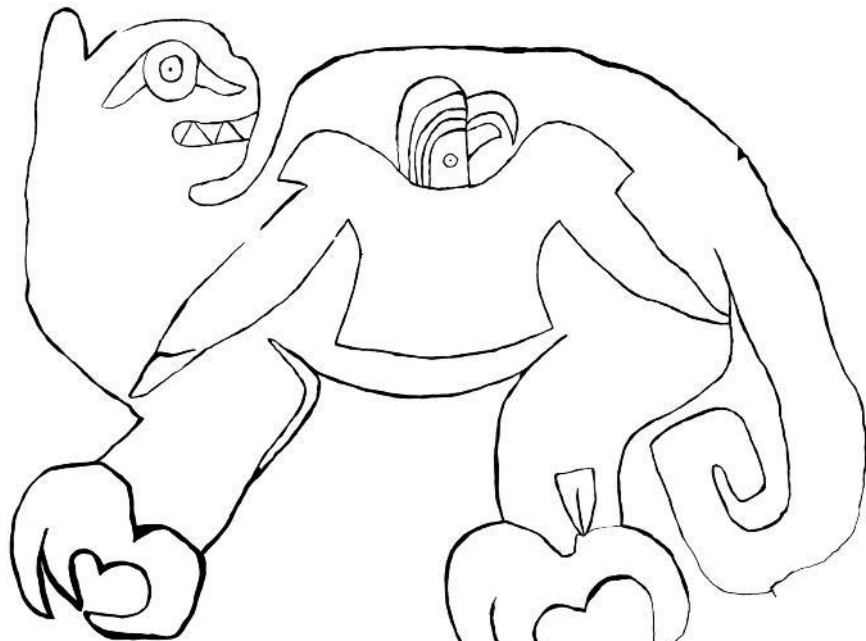


1m





調査のきっかけとなったのは
土器より古い美術様式に属する
「フェリーノ（ネコ科動物）」の
ペトログリフ（線刻岩絵）であった



1m



他の遺跡では
形成期の神殿と岩絵が
数キロの距離を保って
分布することが多い



(チカマ川中流域) (ヘケテペケ川中流域)

モスキート遺跡でも
「フェリーノ」の1.6km東に
土器のないモスキートZ神殿を発見した




モスキート遺跡でも
「フェリーノ」の1.6km東に
土器のないモスキートZ神殿を発見した



さらにその周辺の3地点で
土器のない神殿を発見





モスキートZ神殿 (Z1基壇)

紀元前約1800年～1700年

著作権等の都合により
ここに挿入されていた画像を削
除しました

モスキートZ神殿周辺地図

現在、南岸のモスキート平原へは北岸からの橋がなく、住人はおらず、ロバを放牧するにとどまっている。



かつてモスキート平原にも安定した水源があり、大規模に耕作されていたのではないかと考古学的に検証中である。

水資源が乏しくなった南岸は居住に適さなくなり、もっぱら北岸に神殿と村落の建設が続いたのかもしれない。

2013年時点の湧水

2016年、地元の村役場が主導して南岸への道を造り始めた。
南岸の農作物を車輛で北岸に運ぶ目的。

たまたま耳にした我々考古学者が話を聞きに行き、国（文化省）
に対して無申請であることを知った。
村役場は我々の勧告を受け容れ、文化省の派遣した考古学者
の査察のもと、遺跡を避けて道を完成させた。

2017年、エル・ニーニョ現象による落石で封鎖中。





2013年 何者かの落書き

DESCUBRE

X

ALEX

(アレックスにより発見さる)

地元の有力者らから観光開発の話題が出ることもあるが、恒常的な管理体制を作らない限り文化遺産を傷めるだけの結果になりかねない。



モスキートは
ヘケテペケ谷で唯一
土器を伴わない
神殿遺跡 すなわち
流域最古の神殿である

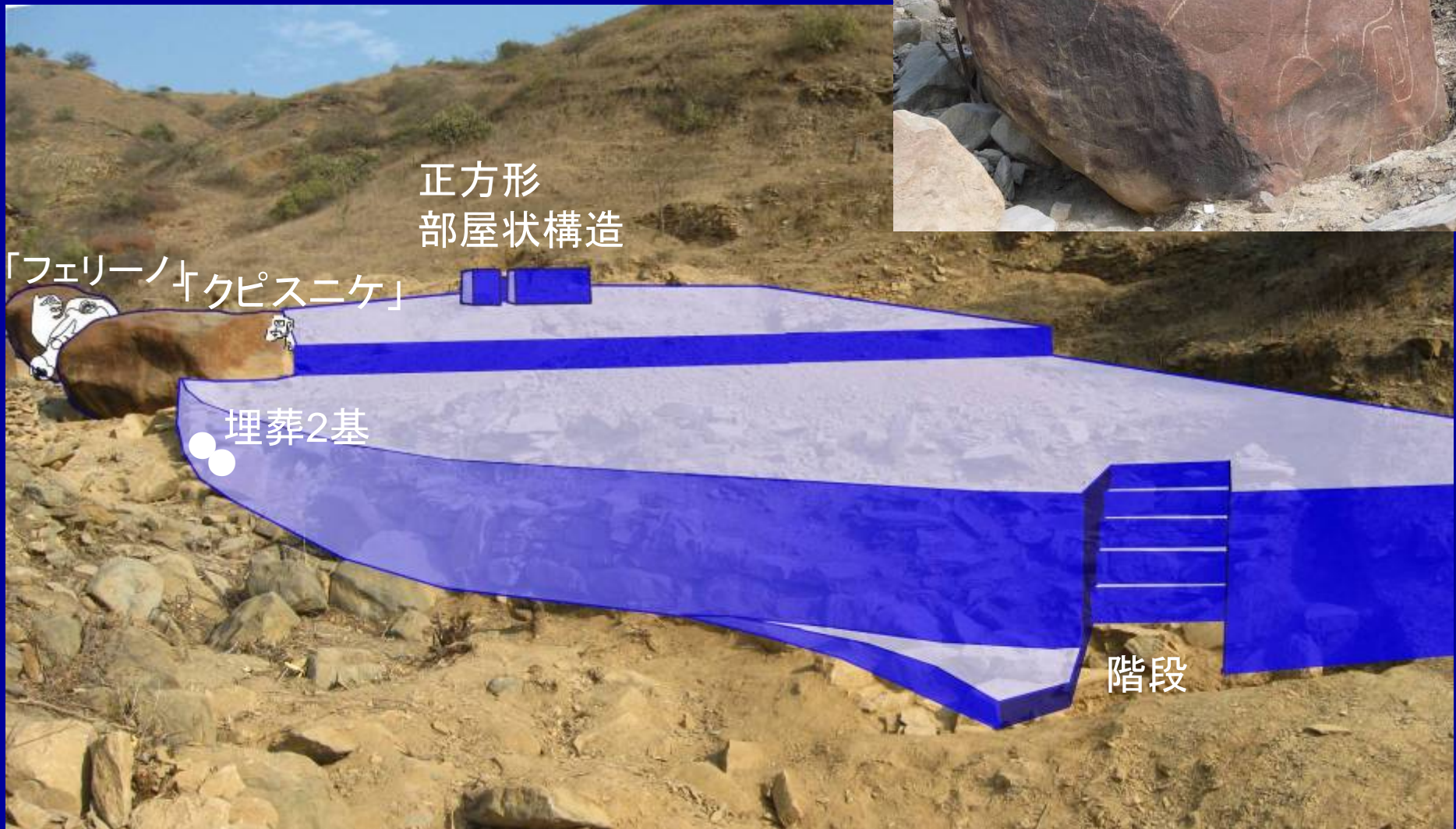


なぜ神殿は
まずこの地点に
発生したのか

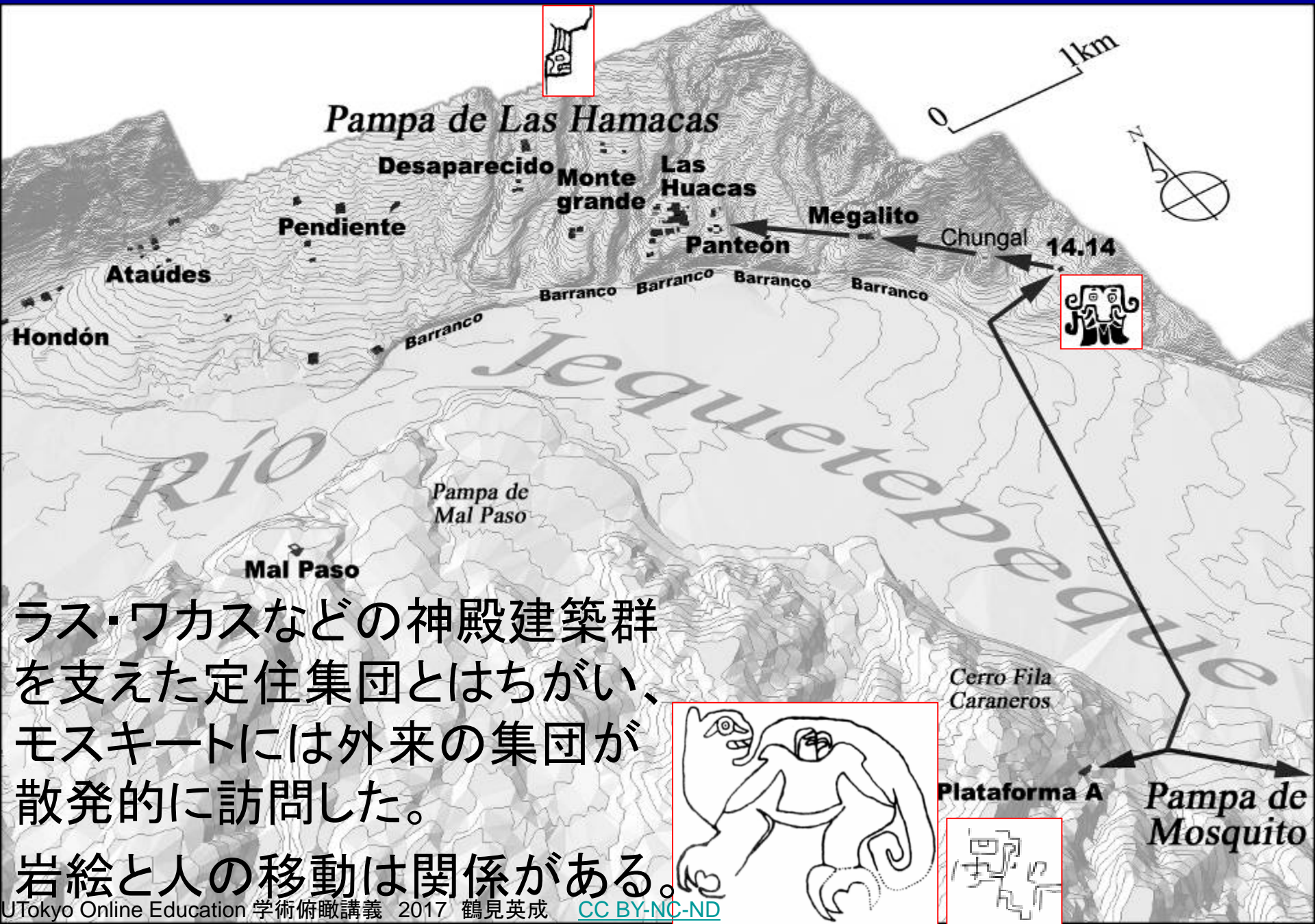


谷とは 東西方向の天然の道であるが
当時は 南北方向の 山越えの道もあり
交差点から神殿が発生したのではないか

モスキートの岩絵の近くで 特異な建築を発見



岩絵は渡河に適した浅瀬の両岸に配置されていた。



ラス・ワカスなどの神殿建築群を支えた定住集団とはちがい、モスキートには外来の集団が散発的に訪問した。

岩絵と人の移動は関係がある。

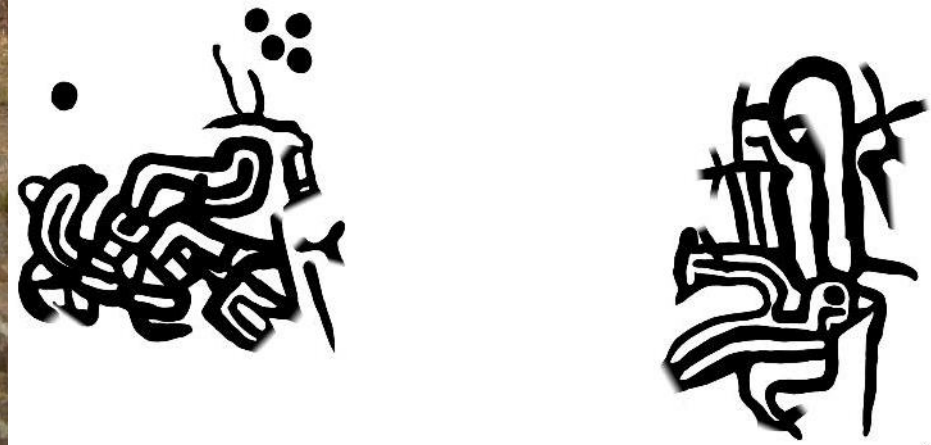
想定された「道」の上を踏査し
形成期の神殿遺跡を多数発見した
(2008年～)


思いのほか巨大な神殿ピラミッドも
無名のまま山中に眠っていた



形成期図像の岩絵も多数発見された

岩絵は旅行者のキャンプや
信仰の場であったと考えられる



- 
- 既知の神殿遺跡
 - 「発見」した遺跡

古代の村落と、現代の村落の立地があまり変わらないと仮定し、村落の周辺から探す。

2010年の発見時点
現在の村落に近いので、保全に留意
するよう文化省に提言書を提出



2012年、道路が造られピラミッドの裾が断ち切られる。道路の目的は私営の鉱山開発だという。





谷峽

峡谷

- 既知の神殿遺跡
- 「発見」した遺跡

渡るのも、
川を伝うのも難しい地形





谷

峡谷の中、例外的に浅瀬である。
道はここを渡って対岸に続くのでは？

峡谷



その先の村へ



宿に荷物を置いて
外を見る



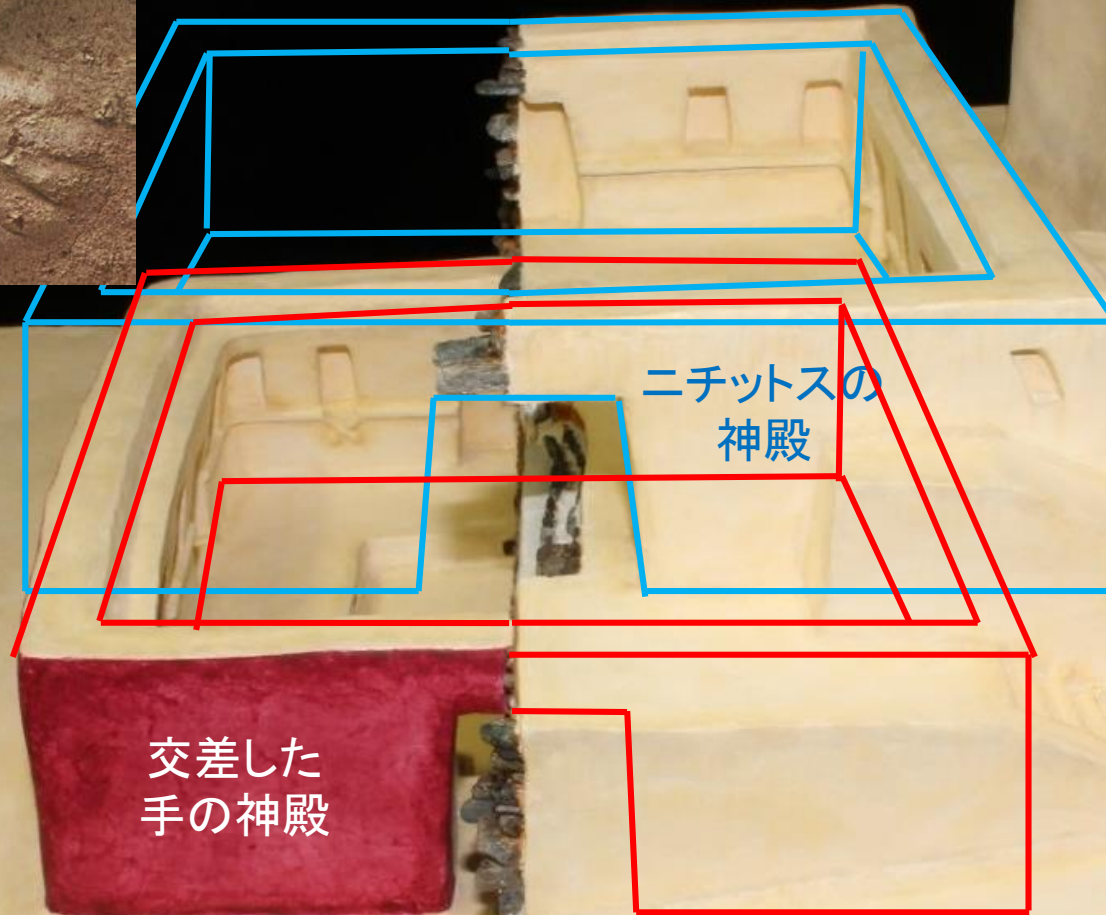
マウンド遺跡の発見
落ちていた土器から形成期のものと確認



破壊されていても、落ちている土器があれば一応仮説は立てられる。
しかし完全に整地されてしまったらこの研究はできない。



コトシュ遺跡



1960年代、「交差した手」の出土は全国に報じられ、コトシュと交差した手は一躍有名になった。

交差した手はワヌコ市民の誇りとして、土産物から大学の校章まで、街中にあふれている。

21世紀に入って、荒廃していた遺跡内が整備され、今日では観光客が多く訪問する。



記念硬貨



国立ワヌコ大学の校章



手厚く保全された「交差した手の神殿」

コトシュ遺跡、とくにミト期の神殿群は垂直に積層している。交差した手の神殿は文化遺産として重要視され、それ以上の掘り下げは不可能で、**最下層に到達することはなかった。**

実用化されたばかりの ^{14}C 年代測定法は技術的な問題があり、誤差の大きい**不正確な値しか得られなかった。**また炭化物サンプルは大きなものが需要で、**測定の機会が限られていた。**

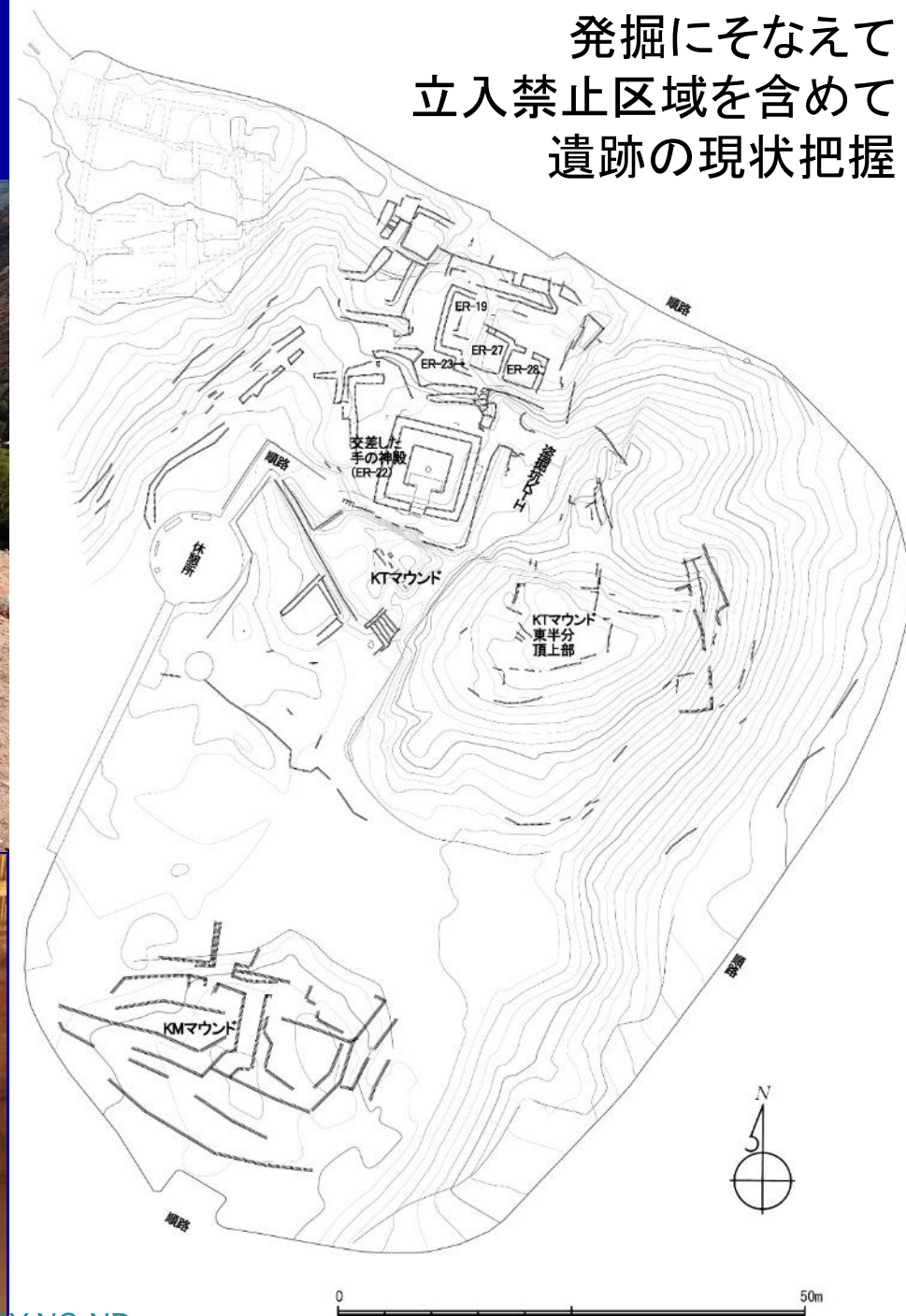
残された問題点

ミト期の年代が暫定値のまま半世紀が過ぎてしまった。

2015年8月 文化省の許可を得て 測量



発掘にそなえて
立入禁止区域を含めて
遺跡の現状把握





2016年

「交差した手の神殿」の床下
を含めて発掘を実施。ミト期
の建築の重なり合いをさらに
明らかにし、年代測定用の炭
化物を多数集めた。



発掘中も観光客が
絶えない。
目隠しネットの下
で作業した。

Disculpen las molestias

-ZONA DE EXCAVACIÓN CIENTÍFICA-



Estamos investigando los edificios
más antiguos en Kotosh escondidos
debajo de los pisos de los templos.

"Proyecto de Investigación Arqueológica: Kotosh, Distrito de
Huánuco, Provincia de Huánuco, Departamento de
Huánuco; Temporada 2016. Excavación."
Estudio organizado por la Universidad de Tokio, Japón

市民・報道関係者・観光ガイドらから多く出
た質問は、
「世界遺産カラル遺跡とどちらが古いか？」
であった。
より最近有名になった他の遺跡をライバル
視していることがわかった。

観光ガイド向け講習会



成果発表報告会



遺跡博物館に写真パネル展示



現地説明会



ワヌコ州報道協会により 調査団メンバーと東京大学が 表彰される



著作権等の都合により、
ここに挿入されていた画像
を削除しました

新聞記事

2016年10月1日Correo
紙

見出し: Coorfinadora de
Prensa distingue a
japoneses por trabajos en
Kotosh



層位的な序列が明らかなサンプルが多いほど精緻な計算ができる。
土器を伴う時代についても層位的にサンプルを採れば、編年はより精緻になる。



東京大学総合研究博物館放射性炭素絶対年代測定室

神殿の「移転」



セロ・ブランコ神殿

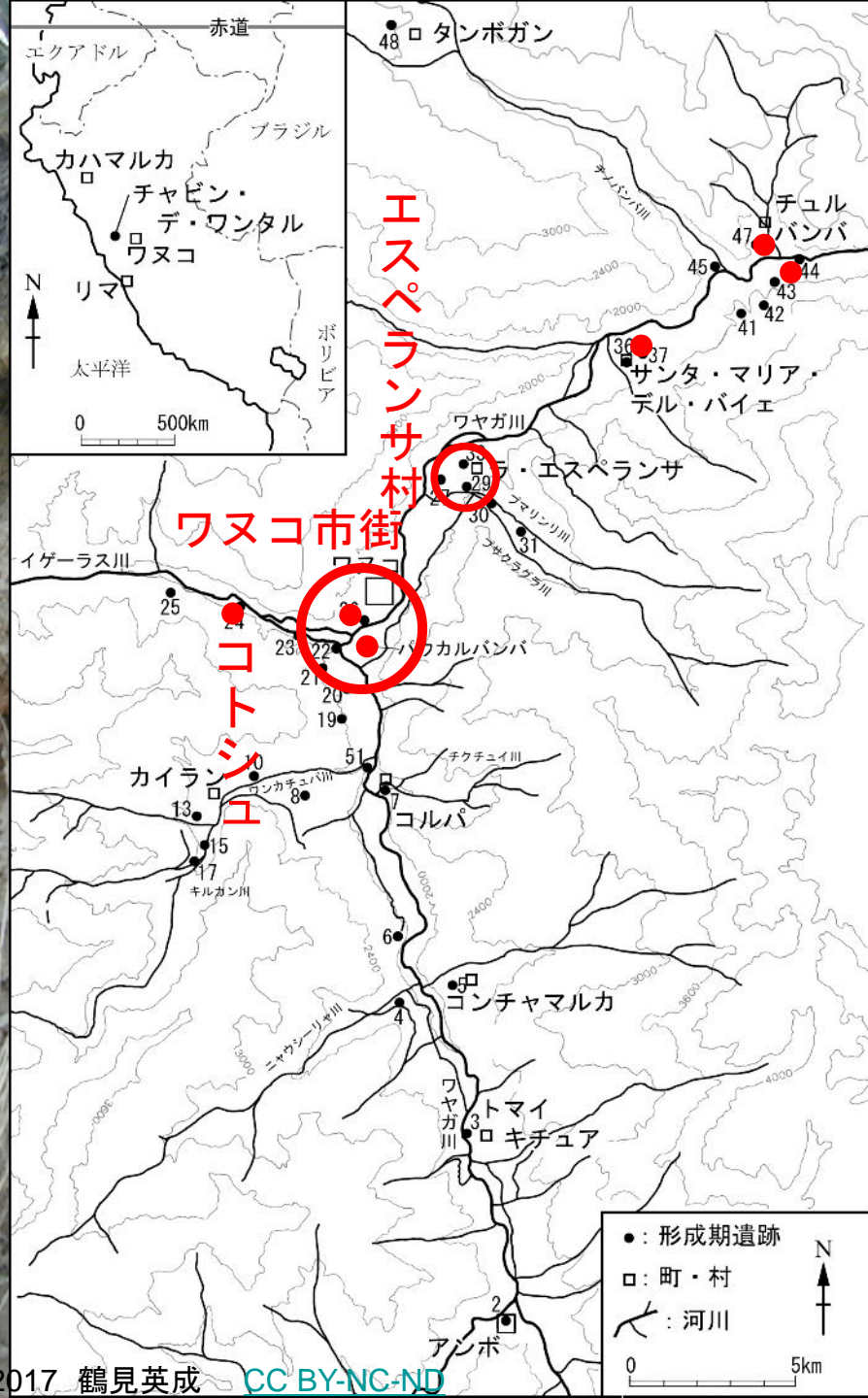


クントウル・ワシ神殿

神殿が移転したとらえる類例

形成期の全期間を通じて、神殿建築が1地点だけで更新され続けたコトシュのマウンドはきわめてまれな例であり、編年の精緻化のためにさらなるデータ収集が必要である。

2001年10月 ワヌコ盆地踏査



三菱財団人文科学研究助成(平成12~14年)
「ペルー国ワヌコ地方形成期文化の研究」
研究代表者:井口欣也

ハンカオ遺跡

ワイラヒルカ期 (形成期前期)
コトシュ期 (形成期中期)
チャビン期 (形成期後期)
サハラパタク期 (形成期末期)
イゲーラス期 (地方発展期)

コトシュ遺跡以外で
すべての時期の土器片を
確認できた唯一の遺跡

さらに下層に

ミト期 (先土器末期・形成期早期)

もあるかもしれない？

三菱財団人文科学研究助成(平成12～14年)
「ペルー国ワヌコ地方形成期文化の研究」
研究代表者: 井口欣也

1980年代 幹線道路Carretera Centralが ちょうどマウンド中央を分断

谷側

山側

三菱財団人文科学研究助成(平成12～14年)
「ペルー国ワヌコ地方形成期文化の研究」
研究代表者:井口欣也



山側

谷側

三菱財団人文科学研究助成(平成12～14年)
「ペルー国ワヌコ地方形成期文化の研究」
研究代表者:井口欣也

谷側はちょうど工事中
文化庁に報告し、工事は中断された。

10年ほどは。



三菱財団人文科学研究助成(平成12～14年)
「ペルー国ワヌコ地方形成期文化の研究」
研究代表者:井口欣也

2001年

谷側

山側

三菱財団人文科学研究助成(平成12~14年)
「ペルー国ワヌコ地方形成期文化の研究」
研究代表者: 井口欣也

2017年

谷側

山側

著作権等の都合により、
ここに挿入されていた画像を削除し
ました

コトシュ遺跡の地図
座標: $9^{\circ} 55'51.1''\text{S}$ $76^{\circ} 16'46.2''\text{W}$

著作権等の都合により、
ここに挿入されていた画像を削除し
ました

ハンカオ遺跡の地図
座標: $9^{\circ} 53'55.0''\text{S}$ $76^{\circ} 13'20.5''\text{W}$

ハンカオのマウンドは、面積ではコトシュと同等かそれ以上。
高さはコトシュがまさる。

2017年9月 4週間の発掘調査を実施。

- ・土器編年・建築の更新過程と対応させて炭化物を採る
- ・さらに下層に先土器段階ミト期の建築があるか確認する

著作権等の都合により、
ここに挿入されていた画像を削除し
ました

ハンカ才遺跡の地図
座標: $9^{\circ} 53'55.0''\text{S}$ $76^{\circ} 13'20.5''\text{W}$

谷側 B区 自動車工場その他で大きく縮小。
壁石はかなり大きく、本来は大規模な建築であったことが
うかがわれる。



土地所有者に発掘許可を求めに行くと、同日すぐに道路拡張のために破壊・整地されることを知らされた。文化省も駆けつけて関係者間で協議。



2日間で手早く発掘
土器のない建築、
土器のある建築、
それぞれから炭を採取



著作権等の都合により、
ここに挿入されていた画像を削除し
ました

ハンカオ遺跡の地図

座標: $9^{\circ} 53'55.0''\text{S}$ $76^{\circ} 13'20.5''\text{W}$





近いうちに一帯で水道工事が行われる予定で、雇用を巡って町の施工主側と、地元の村人とが衝突。
遺跡内が工事区域に入るのかどうかは確認できなかった。



断面から炭化物と
土器片を採取。

道路の反対側から
その位置を断面図にプロット。



現地説明会用図解





ミト期の基壇



かつての地山
先土器建築の最下層、
地山直上の炭化物を採ることは
コトシュでは難しかった。破壊を
逆手に取って良いデータを得た。

まとめ

文明形成期の神殿は、村落と密接な立地を特徴とする。
過去の村落と現在の村落は、その立地が大きく違わない。

耕作に必要な水が涸れてしまったモスキート平原や、密林に飲まれて人が寄りつかなくなった遺跡などは、結果として保護されることがある。


しかし現在の居住域と近接する場合、マウンド遺跡は広い面積を占めるため、開発の対象になる。近年では道路の拡張に伴う破壊がとくに顕著である。

観光開発など、資源として活用されるケースはまれで、短期的な開発の支障として排除されるケースのほうが多い。またすべての遺跡が観光地としての役割を十分に期待できるわけではない。考古学の研究水準を保つためにも遺跡の保全は必要であるが、どのような提言が可能なのか、事例ごとに判断する必要がある。試行錯誤の段階が続くだろう。

むすびに ハンカオ遺跡にて

明日は最後の撮影をして埋め戻し、という午後。
ひとり居残って測量の仕上げをしていると、作業
員の二人(親子)が現場に戻ってきた。

遺跡にコカの葉と酒をささげたいという。



The image shows an archaeological excavation site. A large, deep pit has been dug into the earth, revealing various layers of soil and rock. The pit is lined with large, dark, rounded stones, suggesting it might be a storage or burial structure. The soil is a mix of light brown and dark brown, with some areas showing distinct horizontal layers. Several small white markers are placed around the pit, likely for identification or measurement. The overall scene is one of a well-documented archaeological find.

アンデス文明研究の成果と課題

①遺跡をめぐって —おわり—

出典記載のない図表は
鶴見英成に属します

12/18

アンデス文明研究の成果と課題②博物館をめぐるって



(クントウル・ワシ博物館にて撮影)

